

「青鞥」細目

自明治四十四年九月 第一卷第一号
至大正五年二月 第六卷第二号

高田 瑞穂

まえがき

一、らいてう女史の発刊の辞「元始女性は太陽であった」に徴し、また、青鞥社概則第一条「本社は女流文学の発達を計り、各自天賦の特性を発揮せしめ、他日女流の天才を生まむ事を目的とする」に徴し、創刊当初の「青鞥」の立場が、何よりも「白樺」のそれに近いものであったことは、異論の余地がない。その個性主義において、その天才主義において。

二、そのような発足をしながら、青鞥社が白樺派と正反対の経路を辿らなければならなかったのは何故であったか。白樺派が数々の作家を文壇に送つたのに対し、青鞥社がいつい一人の作家をも生み得なかつたのは何故か。逆に、白樺派が、有島武郎一人を例外として、等しく無関心ないし嫌悪をしか示さなかつた社会問題に対し、青鞥社が強い関心と闘志を示し得たのは何故であったか。

三、思うに、人間集団による社会的運動において、出発当初の主体的志向と、運動自体の客観的意義との間に、さまざまな落差を生ずることは、まぬがれがたい一般的事実である。そして、その間に何等かの外的原因に先ず思いをはせることは、これまた論者一般の風と言つていいであろう。しかし、勿論のこと、外的原因は原因のすべてではない。ここに明治末から第一次大戦のさなかに及ぶ「青鞥」全巻の細目を編んだのは、青鞥社運動の如上の曲折に、内からの一鳥瞰を試みたからである。

四、この細目に関しては左の諸点をあらかじめおことわりしておきたい。

1、使用原本は、主として平塚らいてう女史の蔵本により、早稲田大学蔵本を参照した。らいてう女史ならびに早大図書館に対しここに謝意を表する。

2、大正元年十二月号(第二卷第十二号)はついに未見に終つた。恐らく休刊されたものと思われるが、確認するいとまがなかつた。後日を期したい。

3、左の記号を用いた。

イ、*……………編者註印

ロ、『……………単行本

ハ、「……………新聞・雑誌・作品・論文

ニ、∧ ∨……………発行所

ホ、……………社告・広告・その他

4、終りに、この細目の作成にあたって、成城国文学会の遠藤祐・中村完両君の熱心な協力を得たことを明記しておく。

第一巻第一号 明治四十四年九月一日発行

・表紙(*写真参照。長沼智恵子の絵。黄色刷。以下第一巻第四号まで同体裁)



そぞろごと(*詩)
 死の家(*小説)
 百日紅(*俳句)
 生血(*小説)

与謝野晶子 一―九
 森 しげ女 一〇―一九
 白雨(*保持研子) 二〇―二一
 田村とし子 二二―三六

元始女性は太陽であつた。——青鞞発刊に際して——(*感想)

猫の蚤(*小品)

影——比喻(*ポオの散文詩、平塚明子訳)

喜劇陽神の戯れ(*戯曲)

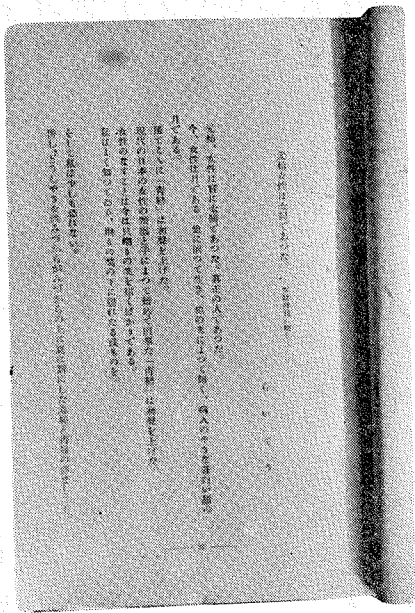
磯のひる(*短歌)

七夕の夜(*小説)

ヘッダ・ガブラー論(*メレジコフスキーの評論の翻訳、訳者は無署名なるも平塚明子)

二号予告

・二号予告
 ・青鞞社概則(*補遺1参照。以下第三巻第一〇号まで同じ)



らいてう

国木田治子

荒木 郁子

物集 和子

物集 和子

三七―五二
 五三―五六
 五七―六一
 六二―八九
 九〇―九一
 九二―一〇九
 一一〇―一三一

一三三二

一三二—一三三

一三三

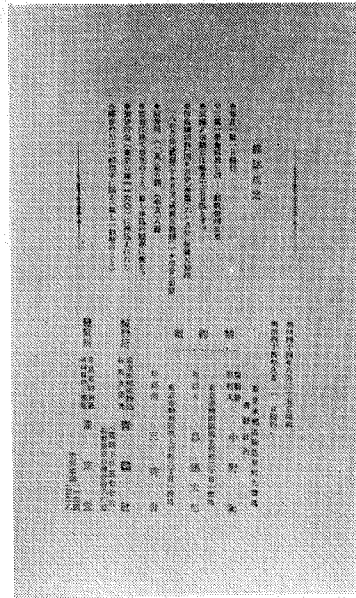
・社員、賛助員名簿（*補遺2参照）

・予告（*青鞞社同人訳『ボオ散文詩集』へ青鞞社出版V）

編輯室より（*読者への通達諸事項のうち、「念の為に云つて置

きますが青鞞は Blue stocking の訳語です」の一項あり）一三四

・雑誌規程、奥附（*写真参照）



・広告（*別紙。「スバル」、「女子文壇」、吉井勇『午後三時』再

版へ東雲堂V、北原白秋『おもひで』再版へ同上V、若山牧水

『別離』再版へ同上V、「創作」、「心の花」、「新婦人」、「歌舞

伎」、生田長江訳『ツアラトウストラ』へ新潮社V、「劇と詩」九

月号・特別附録ノラ号、「俳味」

補遺

1 青鞞社概則

第一条 本社は女流文学の發達を計り各自天賦の特性を發揮せしめ

他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二条 本社を青鞞社と称す。

第三条 本社事務所を本郷区駒込林町九番地物集方に置く。

第四条 本社は社員賛助員客員よりなる。

第五条 本社の目的に賛同したる女流文学者、将来女流文学者たら

んとする者及び文学愛好の女子は人種を問はず社員とす。

本社の目的に賛同したる男女にして社員の尊敬するに足る

と認めたる人に限り客員とす。

第六条 本社の目的を達する為左の事業をなす。

一、毎月一回機関雑誌青鞞を発刊すること。青鞞は社員及

び賛助員の創作、評論、其他客員の批評等も掲載するこ

とあるべし。

二、毎月一回社員の修養及び研究会を開くこと。但し賛助

員の出席随意たるべし。

三、毎年一回大会を開くこと。大会には賛助員客員を招待

し講話を請ふことあるべし。

四、時に旅行を催すこと。

第七条 社員は社費凡三拾銭を毎月納附すべし。社費は毎月会並に

大会の費用と社員、賛助員、客員への雑誌青鞞寄贈費とに

当るものとす。

第八条 雑誌「青鞞」発刊の経費は発起人の支出により、其維持は

社員、賛助員、客員其他の寄附による。

第九条 幹部は編輯係、庶務係、会計係よりなる。

第十条 係員は四人とし、半数づゝ一年毎に交代とす。最初は発起人は是に当る。

第十一条 係員は社員の選挙によるものとす。

第十二条 係員は再選することを得。

2 社員、賛助員名簿

発起人

中野初子、保持研子、木内鏡子、平塚明子、物集和子

賛助員

長谷川時雨、岡田八千代、加藤薺子、与謝野晶子、国木田治子、小金井喜美子、森しげ子

社員

岩野清子、戸沢はつ子、茅野雅子、尾島菊子、大村かよ子、大竹雅子、加藤みどり、神崎恒子、田原祐子、田村とし子、上田君子、野上八重子、山本竜子、阿久根俊子、荒木郁子、佐久間時子、水野仙子、杉本正生

第一卷第二号 明治四十四年十月一日発行

大鼓の音(*小説)	小金井喜美子	一	六
人ごみの中を行きつつ(*詩)	与謝野晶子	七	一一
一諾(*劇詩)	大村かよ子	一一	二六
よそ事(*小説)	目次には「よそ言」とある)		
ある夜(*小説)	尾島 菊子	三二	四九
	岡田八千代	二七	三一

稲の花さく頃(*短歌)

お高(*小説)

花芙蓉(*俳句。句の前に「病床にて」とある)

らいてう

二日間(*小説)

沈黙(*ポオの散文詩の翻訳、訳者無署名)

秋海棠(*俳句)

ヘツダ、ガブラア合評(処女時代のヘツダ、ヘツダは何故結婚したろう、家庭の常客としてのブラック、レエボルグとの再会、テスマンの人物、ヘツダの死、全体に亘つての感想)

スマンの人物、ヘツダの死、全体に亘つての感想

HとY 九一—一〇八

編輯室より(*通達諸事項のうち、社員野上八重子の退社を報ずる一項あり)

寄贈書目

第三号予告

青鞥社概則

社員名簿(*発起人の部を解消して中野初子・平塚明子・保持研子・木内鏡子・物集和子を社員の部に入れ、新社員竜野ともえを加う。社員の部計二四名)

予告(*青鞥社同人訳『ポオ散文詩集』(青鞥社出版))

広告(*色別紙。「女子文壇」、「俳味」、「歌舞伎」、「スバル」、「心の花」、「ホトトギス」など)

寄贈書目	一〇九
第三号予告	一一〇
青鞥社概則	一一〇—一一一
社員名簿	一一一—一一二
予告	一一二—一一三
広告	一一三—一一四

・雑誌規定、奥附（*裏表紙にあり）

第一卷第三号 明治四十四年十一月一日発行

・扉（*裏に「ツアラトウストラ」中の一節を掲ぐ）

風邪（*詩） 与謝野晶子 一―三

夢占ひ（*戯曲） 長谷川時雨 四―一三

安心（*小説） 水野 仙子 一四―二二

枯草（*短歌） 茅野 雅子 二三―二六

道子（*小説） 荒木 郁子 二七―三七

言葉の力（*ポオの作品の翻訳。訳者無署名） 白 雨 三八―四四

菊日和（*俳句） 上田 君子 四五―四六

初秋（*小説） 白 雨 四七―五七

眼玉（*小品） 白 雨 五八―六〇

夕祭礼（*小品） 松本正生子 六一―六七

夜明の灯（*短歌） 原田 琴子 六八―七一

夕化粧（*小説） 木内 鏡子 七二―八七

高原の秋（*感想） らいてう 八八―一〇三

編輯後の雑感 らいてう 一〇四―一〇六

・社員諸姉へ（編輯室より）（*イブセン作「人形の家」について

の批評の募集要項、「人形の家」についての内外研究書目の
列記など。末尾に「本号責任者保持研・平塚明」とある）

・青鞥第四号（ノラ附録）予告 一〇九

・青鞥社概則 一〇九―一一〇

・社員名簿（*係員の部を設け、社員の中から、中野初子・保持

研子・平塚明子・木内鏡子・物集和子―旧発起人―の五名がこ
れに転じている。新入社員は岩田百合子・上田朝子・上野葉子

小林歌津子・鈴木かほる・松井百合子・柳清美の七名。社員の
部、計二六名） 一一〇

・予告（*青鞥社同人訳「ポオ散文詩集」へ青鞥社出版） 一一〇

・寄贈書目 一一〇

・広告（*色別紙、「歌舞伎」、「俳味」、「心の花」、「女子文壇」、

「朱樂」、「スバル」、「芸文」特別号・詩人クライスト、小山内
薫「演劇新声」へ東雲堂、北原白秋「邪宗門」へ東雲堂、『独
歩書簡』六版へ新潮社など）

・雑誌規定、奥附（*裏表紙にあり）

第一卷第四号 明治四十四年十二月一日発行

わが家（*短歌） 与謝野晶子 一―二

夜汽車（*小説） 尾島 菊子 三―一一

蛇影（*小説） 永安 初子 一二―三〇

痛みと芸術と（*感想） 上野 葉子 三一―四五

寂しみ（*詩） 小林歌津子 四六―四八

高原の秋（つゞき） らいてう 四九―六四

一夜 (*小説) 物集 和子 六五—七六
 冬籠 (*俳句) 白 雨 七七—七八

黒猫 (*ポオの小説の翻訳。訳者無署名) 七九—九一
 高窓の下 (*小説) 加藤みどり 九二—一一八

自由劇場の二夜 (*劇評) しぐれ 一一九—一二二
 編輯室より (*「社員諸姉へ御報告迄」の中で、岡本かの子・永安

初子・岡清子・小磯とし子・多賀巳都子・原田琴子の入社を報
 ず。末尾に「本号編輯責任物集和・木内錠」とある)

・広告 (*別紙。「歌舞伎」、「俳味」、「心の花」、「台湾愛国婦人」、
 「女子文壇」、「スバル」、「朱樂」その他)

・雑誌規定、奥附 (*裏表紙にあり)

第二巻第一号 明治四十五年一月一日発行

・表紙 (*意匠変更。以下第二巻第三号まで同じ)

・扉裏 (*平塚雷鳥の文「一切の否定者なる我れは一切の否定者な
 り。植物を、人間を食いて我は靈は榮ゆ。神なる我れは人な
 り。女なり」)

・写真 (*Paula Somary a "Noru")

おきな (*小説) 加藤 籬 一一—二〇
 女の歌 (*詩) 茅野 雅 二一—二四

さすらい (*小説) 木内 錠 二五—四五
 初空 (*俳句) 白 雨 四六—四七

「寒山拾得」と「お七吉三」 しぐれ 四八—五一
 夢 (*詩) 与謝野 晶 五二—五四

われ死なば (*短歌) 柳 清美 五五—五六
 その日 (*小説) 田村 とし 五七—六〇

附録ノラ

松井すま子扮装ノラ (*全身像写真一葉) 六一
 現代悲劇草案 (人形の家の草稿)

社員のノラ批評及び感想
 人形の家より女性問題へ (一 劇に表われたるノラの径路、
 二 ノラの将来、男性対女性の地位)

・写真 (*Agnes Somary als "Noru") 葉 (*上野葉子) 六二—一一四

人形の家 (一 イブセンの作、二 ノラの二面の性格、三 ノ
 ラの自覚、四 人形の家と作者)

みどり (*加藤みどり) 一一五—一二五
 君 (*上田君子) 一二六—一三二

人形の家を読む
 ・写真 (*文芸協会公演「人形の家」ノラ家出の場の舞台写真二葉)

ノラさんに H (*平塚明子) 一三三—一四一
 人形の家に就て Y 一四三—一五四

詩一篇 (*イブセンについての感想詩)

らいてう

一五五

人形の家 (*評論)

シエンネット・リー 綾 訳

一五六—一六一

写真 (* "A doll's house," act I. Mrs. Fiske Max Figma

舞台の上で一番困ったこと 松井すま子談 一六二—一六三

『人形の家』に似た戯曲 無名氏 一六四—一六六

人形の家 (*バーナード・ショウの評論の翻訳) 一六七—一七〇

写真 (*「青鞥社の人々」、平塚明子他在京社員有志八名の写真)

編輯室より (*イブセン作「幽霊」についての批評の募集、与謝野晶子の転居——麴町区中六番町十番地へ——、江木栄・尾竹

一重・河野千歳の人社の通知など。末尾に「本号責任者中野初

・平塚明」とある) 一七一—一七二

・青鞥社概則 (*前号に同じ) 一七二—一七三

・寄贈書目 一七三

・予告 (*青鞥社同人訳『ボオ散文詩集』へ青鞥社出版) 一七三

・雑誌規程、奥附

・広告 (*別紙。「女子文壇」、「スバル」、「俳味」、「歌舞伎」、「シ

バキ」創刊号、「新女学」創刊号、「アララギ」、「朱鸞」、「芸

文」、長谷川時雨『日本美人伝』へ聚精堂、小島文子『現代男

性観』へ同上、徳田秋声『徳』へ新潮社、生田長江訳『ツア

ラトウストラ』へ同上) など)

第二卷第二号 明治四十五年二月一日発行

小唄

しぐれ

一—四

脚本叔父ワニーヤ

チエホフ作 瀬沼夏葉訳

五一—一三

無題 (*詩)

あきり (*与謝野晶子)

一四—一六

人の夫 (*小説)

神崎 恒

一七一—二四

その折々 (*短歌)

原田 琴

二五一—二八

他人の子 (*小説)

木内 錠

二九—四〇

牙え返る (*俳句)

白 雨

四一—四二

枯草 (*小説)

岩野 清

四三—五一

・うめくさ (*コリント前書の一節)

荒木 郁

五二—七五

戯曲 闇の花

七五

・うめくさ (*ショウペンハウエルの文章の一節)

七五

心象事実 (内山楓葉氏の経験、秋岡龜太郎氏の経験。*宗教的盤

感というものについて) らいてう記

七六一—八二

赤い死の仮面 (*ボオの作品の翻訳。訳者無署名) 八三一—一〇〇

・写真 (*「青鞥社ノ人」平塚明子他六名)

編輯室より (*一月三日、大森森ヶ崎「富士川」における新年会

の模様とその時の寄書など。なお、末尾の通達諸事項のうちに

「九月以来正月迄」の「寄附金総計五拾壹円四十銭也」、「本号

責任者木内錠・保持研」とある)

一〇一—一〇五

・三月号予告 一〇六

・青鞆社概則

・社員名簿 (* 社員名簿に、長沼智恵子等一八名の名加わる)

・予告 (* 青鞆社同人訳『ポオ散文詩集』へ青鞆社出版)

・寄贈書目 一〇八

・広告 (* 別紙。与謝野晶子『青海波』へ有朋館、戸川秋骨『エマ

・『ソソ文集』下巻へ玄黄社、『スバル』、「劇と詩」、「アララ

・ギ」、「新婦人」、「シバキ」、「心の花」、「俳味」、「歌舞伎」、「芸

・文」、「女子文壇」、「新女学」)

・雑誌規定、奥附 (* 裏表紙にあり)

第二卷第三号 明治四十五年三月一日発行

きさらぎ (* 短歌)

茅野 雅 一 一 四

移りゆく心 (* 詩)

与謝野晶子 五 一 七

脚本 叔父ワーニヤ (承前)

チエホフ作 瀬沼夏葉訳 八 一 二〇

母の死 (* 小説)

岩田 由美 二 一 三 四

エロスとチャーミオンの対話 (* ポオの作品の翻訳。訳者無署名)

名) 三 五 一 四 一

この胸に (* 短歌)

三ヶ島よし 四 二 一 四 三

降神 (短篇)

らいてう 四 四 一 五 三

或日と或日 (* 日記)

田原 祐 五 四 一 六 三

『最終の靈の梵鐘に』 (* 詩)

習作 (* 戯曲)

我が扉 (* 短歌)

木瓜 (* 俳句)

お葉 (* 小説)

二月の小説を読む (中央公論、ホトトギス、三田文学、劇と詩、

ザムボア、新小説、白樺)

幽霊を論ず メレジコウスキー 武市綾訳 一 一 〇 一 一 二 二

「ゴースト」を読む

林 千歳 一 二 三 一 一 二 九

編輯室より (* 三ヶ島よし子、橋爪梅子、安月皐月、山田秀子等

の入社を報する一項あり。末尾に本号責任者「中野初・物集

和」とある)

・新刊書 (* 与謝野晶子『青海波』へ有朋館、与謝野晶子『新訳源氏

・物語』上巻へ金尾文淵堂、木下尙江『創造』へ同上) 一 三 〇

・寄贈雑誌

・小説号 (次号予告) (* 四月号は「全部小説で充たすこと」な

らびに、その執筆者の予告) 一 三 一

・雑誌規定、奥附

・広告 (* 別紙。生田長江『最近の小説家』へ春陽堂、森田草平

『自敘伝』へ同上、『心の花』、『朱鑠』、北原白秋、『おもひで』

へ東雲堂、『劇と詩』、『俳味』、『独歩書簡』へ新潮社、『歌

舞伎』、『女子文壇』、『シバキ』、戸川秋骨訳『エマーソン論文

集』八玄黄社V、高橋五郎訳『ベーコン論説集』八同上V、「新婦人」、「スバル」など多数)

第二卷第四号 明治四十五年四月一日発行

(*小説特輯号)

- 表紙(*意匠変更。尾竹紅吉の絵)
- 写真(*「最近の与謝野晶子氏と御家族」)

圓窓より(*「我れ神を見、神を知るとき、神我れを見、我れを知る。見るものと見らるゝものと、知るものと知らるゝものとは一なり。神神を見、神を知る」以上全文)

老	尾島 菊	二一	八
執着	加藤みどり	九一	二六
湖畔の夏	茅野 雅	二七一	三六
習作の一	杉本 正生	三七十	五七
乙弥と兄	林 千歳	五八一	六六
旅	上田 君	六七一	八一
暗闘	岩野 清	八二一	九三
タイピスト	神崎 恒	九四一	一〇一
手紙	荒木 郁	一〇二一	一〇六

附録

●青鞥研究会(*「四月五日(第一金曜日)より開始」の文学研究会について。課題・講師は「モーパッサンの短篇(金曜日)生田長江氏」「ダンテの神曲又はメタリリング、トルトイ、エマソン、以上諸大家の書中(火曜日)阿部次郎氏」。日時・場所・会費は毎週火金の二回、午後三時より五時迄」「本郷区駒込蓬萊町万年山(勝林寺)」「一ヶ月金五拾銭」)

脚本 叔父ワーニヤ(承前)

チエホフ作 瀬沼夏葉訳 一〇七一―一二一

圓窓より(*感想) らいてう 一二二―一二六

編輯室より(*与謝野晶子の巴里遊学、係員木内鏡子の辞任と荒木郁子の就任、松尾豊子・木村幸子の入社など。なお「本号責任者荒木郁・平塚明」とある)

●寄贈書目 一二八

●雑誌規定、奥附

●広告(*別紙。「象徴芸術」第一号、「白樺」、厨川白村『近代文学十講』八大日本図書株式会社V、「アララギ」、「シレエネ」、ベルレーヌ『月光と夜楽』―近代詩集第一篇―八文好堂V、「ザンボア」、土岐哀果・歌集『黄昏に』八東雲堂V、森川葵村・歌集『夜の葉』八同上V、「芸文」、「みづゑ」、「女子文壇」、田岡嶺雲訳註『和訳春秋左伝』八玄黄社V、土井晩翠『曉鐘』十一版八東京堂V、「心の花」、「俳味」、「スバル」など)

第二卷第五号 明治四十五年五月一日発行

- ・表紙 (* 意匠変更。石崎春五の絵)
- ・青鞥研究会 (* 扉裏、内容、体裁前号に同じ)

桃色の灯 (* 短歌)	三ヶ島 霞子	一	三
あきらめし恋 (* 短歌)	原田 翠子	四	八
習作の二 (* 小説)	杉本 正生	九	二三
るねむり (* 小説)	三島 絹	二四	三一
赤い扉の家より (* 書簡体感想)	尾竹 紅吉	三二	五三
肖像画 (* ポオの短篇の翻訳。訳者無署名)	田沢 操	五四	五八
雨の日 (* 日記体感想)	岩野 清	六五	七五
日記の断片			
圓窓より——四月の評論二三—— (* 白松南山氏の神になる意			
志 (早稲田文学)、相馬御風氏の近代主義の第一人 (早稲田文			
学)、金子筑水氏の運命と自己 (中央公論)、徳田義富氏のギユ			
ヨ一の道徳無義務論 (丁酉倫理講演集)			
らいてう		七六	八九
白 雨		九〇	九一
岡田八千代		九二	一〇〇
戯曲 叔父ワーニヤ			
チエホフ作 瀬沼夏葉訳		一〇一	一一二

編輯室より (* 最初に「青鞥四月号 (小説号) は去る十八日の夜、出版法第十九条違反により発売を禁止されました」の一項あり。他に、社員保持研子・尾竹紅吉の東京への転居。研究会の日時、ズーデルマン作「故郷」の女主人マグダについての批評の募集要項、青鞥社の移転—本郷区駒込蓬萊町万年山へ—、物集和子の編輯辞任、伊藤澄江・早川八重子の入社、六月号の予告など)

- ・新刊書 (* 太田水穂『新訳伊勢物語』ハ博信堂、小川未明『物言はぬ顔』—現代文芸叢書第十編ハ春陽堂、斉藤笹舟『親のな息子』) 一一三—一二四
- ・四月の雑誌 (* 「三田文学」他二三誌の誌名のみを挙ぐ) 一一四
- ・六月号の研究問題 (* マグダ研究について) 一二四
- ・雑誌規定、奥附
- ・広告 (* 別紙。徳田秋声『足跡』ハ新潮社、女子文壇、ザムボア、「劇と詩」、「北方文学」第一号、「モザイク」創刊号、「芸文」、「みづゑ」、「心の花」、「アララギ」、「歌舞伎」、「白樺」、「スバル」、「シバホ」、「短檠」など)

第二卷第六号 明治四十五年六月一日発行

- ・表紙 (* 意匠変更。長沼智恵子の絵。以下第二卷第八号まで同じ)
- 脚本 叔父ワーニヤ (承前)
- チエホフ作 瀬沼夏葉訳 一一 一五

史劇延寿(二幕三場) 木内 鏡 一六一—五四

マルゴ(*小説) モーパッサン 増田初訳 五五一—六〇

りう子様記(*書簡) 森 しげ女 六一—六三

油煙(*短歌) 三ヶ島 葎 六四—六六

野の声(*短歌) 橋爪 うめ 六七—六八

ある女の夢物語(*詩) 小林 歌津 六九—七二

アモンテイレードの樽(*ポオの短篇小説の翻訳。訳者無署名)

習作の三(*小説) 杉本 正生 七三一—八三

客(*小説) 小笠原さだ 一〇〇—一〇九

日記の中より 紅 吉 一一〇—一一八

紫陽花(*俳句) 白 雨 一一九—一二〇

編輯室より(*五月二三日の同人会などの報告によつて、「私達は

何処迄も私自分を偽れなかつた。今の場合。私達同人は、決して

世の人の叫ぶ様な新しい女ぢやない、私達は反抗と嘘を全く

知らない。空虚な私達の今の生活には同人のみんなが泣いて

ゐる。世間の人に、私達の生活を話してやりたい。何処迄も真

面目に、正直に、仕事を執つてゐる私達を」という一節があ

る。他に、研究会の日時・場所、係員と社員との面会日、与謝

野晶子の出立—五月五日—、畠山敏子の入社など)

一一二—一二五

・次号予告

・寄贈書目

附録 マグダ

・事務所移転(*「本郷区駒込蓬萊町万年山内」へ)

・写真(*「イレエネトリイシユのマグダ」)

文芸協会のマグダ(*文芸協会公演「マグダ」についての感想)

読んだ「マグダ」(*原作「マグダ」についての批評) しぐれ 一一—五

・写真(*「須磨子のマグダ」) らいてう 六一—一三

マグダに就て(*文芸協会公演「マグダ」についての断想三篇) ちゑ、紅吉、鏡 一四—一七

自由劇場第六回略評 岡田八千代 一八—二一

Inferno. III(*英訳ダンテ「神曲」地獄篇・一一二章より)

雑誌規定、奥附(*発行所青鞜社住所変更)

青鞜研究会(*「ダンテの神曲(火曜日)阿部次郎氏」、「モー

パッサンの短篇(金曜日)生田長江氏。日時・会場など、第

二巻第四号で註せるものに同じ)

・広告(*別紙。「女子文壇」、「芸文」、「心の花」、「みづゑ」、「歌

舞伎」、「シバキ」、「短髪」、「モザイク」、「スバル」、「ザムボ

ア」、「劇と詩」、「白樺」、「詩歌」、「北方文学」、「俳味」、「アラ

ラギ」)

第二卷第七号 明治四十五年七月一日発行

脚本 叔父ワーニヤ(承前)

チエホフ作

瀬沼夏葉訳

一 一三

モルヒネと味噌(喜劇一幕)

上田 君

一四 二四

わが身(*短歌)

三ヶ島よし

二五 二七

習作の四(*小説)

杉本まさを

二八 四一

或る夜(*小説)

小笠原 貞

四二 五三

樹下閣(*俳句)

白 雨

五四 五五

「ルーゼン」を弔ふ(*評論)

上野 葉

五六 六六

帝國劇場の六月女優劇を見る (ビョルソン原作・小山内薫氏訳)

「新夫婦」、近松原作・岡本綺堂脚色「万年草」、松居松葉氏新作

「歌劇釋迦」、太郎冠者新作「喜劇・出来ない相談」、新作所作事「風俗名所合」

紅 吉 六七 八四

八五 九一

仙女島(*ポオの作品の翻訳。訳者無署名)

圓窓より(*田中王堂「哲人主義」、千葉鉦蔵訳「輓近倫理思潮の傾向」についての感想、批評)

らいてう

九二 一〇三

祭(六月の日記帳より)

歌 津

一〇四 一〇六

「あねさま」と「うちわ絵」の展覧会(*展覧会見聞記)

紅 吉

一〇七 一〇九

編輯室より(*「家庭週報」—日本女子大桜楓会—再刊への慶び、

新入会者、藤井夏・小笠原貞・北原末・伊藤澄江、研究会七、八月休会の予告、杉本正生「浦本みるめ」と改名など、他に事項多し) 一一〇—一二二

次号予告

一一四

寄贈書籍及雑誌

一二四

予告(*青鞜同人訳・紅吉装釘「ポオ散文詩集」九月出版)

一二五

一周年記念号(*九月号—一週年記念号—に対する社員よりの原稿募集とその要項)

一一六

青鞜研究会(*前号に同じ)

一一六

雑誌規定、奥附

一一六

広告(*色別紙。「女子文壇」、「シバキ」、「みつゑ」、「心の花」、

「サムボア」、北原白秋「桐の花」八東雲堂V、木下李太郎「和

泉屋染物店」八同上V、石川啄木「悲しき玩具」八同上V、「俳

味」、「モザイク」、「芸文」、「峽湾」第一、「スバル」、「白樺」、「北方文学」、「劇と詩」、「アララギ」など)

第二卷第八号 明治四十五年八月一日発行

魔性の女(*短歌)

原田 琴

一一 五

脚本 叔父ワーニヤ(承前)

チエホフ作 瀬沼夏葉訳

六一 一二

妻(*小説)

モーパッサン 増田 初訳

二二 二八

教会と魔術と鳥と (*小説) 人見 直 二九—四五

宝玉 (*短歌) 夏 四六—四九

日盛 (*俳句) 白 雨 五〇—五三

群衆中の人 (ボオの作品の翻訳。訳者無署名) 五四—六五

夏の日と昼顔 (*詩) 紅 吉 六六—七五

圓窓より (*「茅ヶ崎へ、茅ヶ崎へ」と傍題し、雑録としてあるが、

内容は、当時の筆者と尾竹紅吉―富本一枝―との関係にふれたもので、実名小説ともいえる作品。筆者の『わたくしの歩いた道』(新評論社)中の「七 青鞥社運動盛りあがる」の項参照)

七六一—一〇八

編輯室より (*九月号—一週年紀念号—への原稿募集とその要項、

七月号「圓窓より」の誤植正誤表、小室常・野村香女・神近市

子・人見直の入社など) 一〇九—一一〇

・南湖便り (*白雨と紅吉の茅ヶ崎からの便り) 一一二

・寄贈書籍及雑誌 一一二

・雑誌規定、奥附

・広告 (*別紙。内田魯庵訳『復活』上巻(三版)下巻(三版)へ丸善

株式会社、

「心の花」、

「芸文」、

「モザイク」、

「峽湾」、

「歌舞伎」、

「劇と詩」、

第二卷第九号 大正元年九月一日発行

(*一週年紀念号)

・表紙 (*意匠変更。奥村博士の絵)

わがまゝ (*短歌) 原田 琴子 一一—六

泥水 (*小説) 小笠原 貞 七—二七

老師 (*小説) 木内 錠 二八—五二

ふた親のまへ (*短歌) 武山 英子 五三—五五

懷疑 (*小説) 加藤 緑 五六—八一

習作の五 (*小説) 杉本 正生 八二—九六

おもふこと—青鞥社同人詠草— (*短歌) 岩淵百合、矢沢孝、北原末 九七—九九

手紙の一ツ (*書簡体小説) 神近 市 一〇〇—一二〇

深草の里より (*短歌) 白 雨 一一一—一二四

その小唄 (*書簡体感想) 紅 吉 一二五—一三二

巴里雜詠 (*詩) 与謝野晶子 一三三—一三七

京之助の居睡 (*小説) 野上弥生子 一三八—一六四

重子 (*小説) 加藤 箒 一六五—一七七

二人の女 (*対話) 岡田八千代 一七八—一八三

ある日の午後—一幕— (*戯曲) 長谷川時雨 一八四—二〇八

新しく世に出たチエホフの書簡 瀨沼夏葉訳 二〇九—二一三

女医の話 (*小品)

水野 仙子 二一四—二一七

お使ひの帰つた後 (*小品)

田村 俊 二一八—二二二

写真 (*「南郷の朝」、平塚明子・生田長江等七名の写真—茅ヶ崎にて—)

南湖便り (*平塚明子等青鞆社同人の茅ヶ崎における避暑生活の一端)

二二三—二二四

編輯室より (*「九月から青鞆の出版及び発売に関する一切の実務を東雲堂に一任」の結果、青鞆社の事務が編輯本位の態勢をとりうることにふれ、「全く今迄は雑務の為に忙殺されて居たので、為たい事も出来なかつたし、粗漏の点多かつたがこれからは何でも出来そうです。私共は懸命になります。而して自重しつゝ一層の奮励を期しませう」と編輯陣の決意を披瀝す。その他印刷所の変更など)

拾月号予告 二二五—二二七

雑誌規定、奥附 (*従来の雑誌規定八項目に次の二項目加わる。二二七

「編輯事務、寄贈図書雑誌、及研究会に関する事務は万年山青鞆社へ」、「雑誌購読、社費払込、広告申込、交換広告其他販売に関する一切の事務は東雲堂へ」、なお末尾に「本号に限り特価四拾銭」。奥附、印刷人は「佐藤保太郎」、印刷所は「東京市京橋区新栄町一丁目一番地文祥堂」、発売所は「京橋区南伝馬町三丁目東雲堂書店」となる)

広告 (*色別紙。厨川白村「近代文学十講」八版へ大日本図書株式会社、
「クレナキ」、「朱樂」、木下李太郎「和泉屋染物店」
他戯曲五篇へ東雲堂、若山牧水「死か芸術か」へ同上、吉井

勇「水莊記」へ同上、三木露風「白き手の獵人」へ同上、東雲堂書店出版書目、「現代の洋面」、「スバル」、「白樺」、「アララギ」、「心の花」、「みづゑ」、「歌舞伎」、「芸文」、「詩歌」、前田夕暮「陰影」へ東京堂、
「モザイク」、「峽湾」、「奇蹟」第一卷第一号)

第二卷第十号 大正元年十月一日発行

表紙 (*意匠変更。第二卷第一一号まで同じ)

白き蛾 (*短歌)

茅野 雅 一—四

近代人の告白

ミュンセエ 野上弥生子訳 五—九

僕 (*小説)

人見 直 一〇—三二

死の前 (*小説)

荒木 郁 三三—五〇

旅に行く (*感想)

尾島 菊 五一—五八

諒闇 (*短歌)

原田 琴 五九—六三

進化上より見たる男女 (*評論)

習作の六 (*小説)

上野 葉 六四—七九

戯曲 お夏のなげき (二幕)

杉本 正生 八〇—八九

お夢さまの小函 (*詩)

小林 歌津 九〇—九八

圓窓より (女としての樋口一葉)

紅 吉 九九—一〇一

らいてう 一〇二—一二八

帰へつてから (* 退院帰京後の小感)

紅 吉 一二九—一三一

・青鞆研究会

一三二

編輯室より (* 中津江天流・岡田ゆき・片野珠・三島塔・高木意

一三三—一三七

・青鞆社概則

・寄贈雑誌及書籍

一三八

・雑誌規定、奥附 (* いずれも前号に同じ)

一三八

第二卷第十一号 大正元年十一月一日発行

わが少年 (* 短歌)

原田 琴 一—五

近代人の告白 (つゞき)

アルフレッド・ド・ミュッセエ 野上弥生子訳

六一—一四

髪 (* 長篇小説の序)

杉本 正生 一五一—二四

沈黙 (* 小説)

アンドレイフ 増田初訳 二五一—四七

東の渚 (* 詩)

伊藤 野枝 四八一—五〇

水囊 (* 小説)

加藤みどり 五一—六四

青鞆社詠草 (* 短歌)

山口澄子、岸照子、児島てるを、青井禎子

六五—六八

おきみ (* 小説)

藤岡 一枝 六九—七九

汗ばむ頬 (* 短歌)

岡本 かの 八〇—八二

メールストロムの渦 (* 小説)

ポオ らいてう訳 八三一—九四

群衆のなかに交つてから (* 感想)

紅 吉 九五—九九

・予告 (* 文芸協会第四回公演の作品名、日時、場所、配役などに

ついて)

文芸協会第四回公演用脚本

二十世紀 (You Never Can Tell) 梗概

英国 バアナアド・シヨール氏作

日本 松居松葉氏訳 一〇一—一〇三

冷たき魔物 (* 詩)

紅 吉 一〇四—一〇八

編輯室より

一〇九—一一一

・雑誌規定、奥附

・広告 (* 色別紙。ブランドス著 中沢臨川訳「露西亞印象記」三

版ハ中興館V、窪田通治「空穂歌集」再版ハ同上V、吉江孤雁

「青空」ハ同上V、岡田八千代編「関秀小説十二編」ハ博文館V、

再版「一葉全集」ハ同上V、「朱樂」ハ「黒耀」、若山若水「死か芸

術か」ハ同上V、吉井勇「水注記」ハ同上V、北原白秋「桐の花」

ハ同上V、木下李太郎「和泉屋染物店」ハ同上V、石川啄木「悲

しき玩具」再版ハ同上V、北原白秋「思ひ出」第六版ハ同上V

若山牧水「別離」第四版ハ同上V、東雲堂書店出版書目、「白

樺」ハ「アララギ」、「スバル」、「美術新報」、前田夕暮「陰影」

ハ白日社V、「詩歌」、「俳味」、「モザイク」、「心の花」、「奇蹟」

「現代の洋画」、「ヒュウザン」第一号、「みづゑ」、「歌舞伎」、「劇と詩」その他

第三卷第一号 大正二年一月一日発行

・表紙（*意匠変更、尾竹紅吉の版画。以下第三卷一、二号まで同じ）
 ・広告（*色別紙。長曾我部菊子『情熱の女』へ岡村書店、尾上柴舟『日記の端より』へ辰文館、小山内薫『演劇新声』など）

近代人の告白

アルフレッド・ド・ミュッセ	野上弥生子訳	一	八
青き聲（*短歌）	武山 英	九	一二
巳里雑詠（*詩）	与謝野しやう	一三	一五
新らしき望多き地へ（*小説）	シエンキウイツチ 増田 初訳	一六	二八
『王昭君』筋書	長谷川時雨	二九	四四
日常生活（*詩）	茅野 雅	四五	四八
ひな鳥（*小説）	小笠原さだ	四九	六四
ホイットマン論	エリス 榊纒訳	六五	七五
愛の郷へ（*書簡体小説）	荒木 郁	七六	九二
あまき縛め（*短歌）		九三	九九
夢の夢（*短歌）	三ヶ島 茂	一〇〇	一〇六
東北風（つゞき）			

年（*小説）	ブヂシチェフ 瀬沼夏葉訳	一〇七	一一六
京人形（*短歌）	岡田八千代	一一七	一二二
Sよ、なとてさは聞きわけなき（*短歌）	岩淵 百合	一二三	一二五
雑木林（*小説）	岡本 かの	一二六	一二八
編輯室より（*柴田かよ・林きみ・原阿佐緒・西田時子の入社、其他）	神崎 恒	一二九	一三五

・寄贈書籍紹介（*水野葉舟『妹に送る手紙』へ実業之日本社、に対する簡単な読後感） 伊藤 野枝 一三七

附録 新しい女、其他婦人問題に就て

恋愛と結婚（*訳出に当つての感想、ハアベロク・エリスの序文など）	らいてう	一一	一九
新らしき女の道（*評論）	伊藤 野枝	二〇	三五
新しい女の解説 長曾我部菊子（*生田花世）	上野 葉	三六	四五
超脱俗観（*感想）	宮崎 光	四六	五六
諸姉に望む	堀 保	五七	六〇
私は古い女です		六一	六五
・広告（*色別紙。「女学世界」増刊「新しい女と古い女」特輯、「朱鍵」、イブセン作・中島清訳『復活の日』へ上田屋書店、			
「とりで」、「白樺」、白樺叢書—武者小路実篤『お目出度人』世			

聞知らず、志賀直哉「留女」ハ洛陽堂、^{るふ}「俳味」、^{るふ}「みつゑ」、
 『大下藤次郎遺作集』ハ春鳥会、^{るふ}「美術新報」、^{るふ}「黒耀」、^{るふ}「スバ
 ル」、「アララギ」、「モザイク」、「心の花」、「歌舞伎」、「現代の
 洋画」、「ヒュウザン」、「洋画研究録」
 ・雑誌規定、奥附（*裏表紙にあり。欄外下に「本号特価四拾銭」
 とある）

第三卷第二号 大正二年二月一日発行

（*この号発禁となる）

・青鞥社第一回公開講演会（*目次裏。生田長江「新しき女を論
 ず」、岩野泡鳴「男のする要求」、馬場孤蝶「婦人のために」、
 岩野清「思想の独立と経済上の独立」、阿部次郎「演題未定」）

ホイットマン論	エリス	榊纓訳	一	一一
あな妬し（*短歌）	三ヶ島	葭	一一	一六
東北風	ブヂシチュフ	瀬沼夏葉訳	一七	二六
恋あらそひ（*短歌）	白	雨	二七	三一
哀悼（*短歌）	岡本	かの	三二	三四
此の頃の感想	伊藤	野枝	三五	四四
ふけよ川風（*小説）	小林	歌津	四五	五二
一夜妻（*短歌）	原田	琴	五三	五七
復讐（*小説）	人見	直	五八	六九
宴の後（*短歌）	原	阿佐緒	七〇	七四

目黒から（*平塚明子宛の書簡）

岩野	清	七五	七九
岸	照	八〇	八六
一年間（*筆者注して「私の近き過去に於ける記録」とある）	らいてう	八七	一〇〇

編輯室より（*らいてう「新しい女中」ハ央公論一月号、^{らいてう}「ジャ
 パン・タイムス」紙一月一日号に英訳掲載されたことなど）

附録

新しい女、其他婦人問題に就て

婦人問題の解決（*論文）	福田	英	一	七
冷酷なる愛情観と婦人問題（*論文）	岩野	泡鳴	八一	一五
談話の代りに	阿部	次郎	一六	二二
恋愛と結婚（つゞき）	エレン・ケイ	らいてう訳	二三	二七

・広告（*色別紙。長曾我部菊子「情熱の女」ハ岡村書店、石井
 柏亭「歐洲美術通路」ハ東雲堂、青鞥叢書「岡本かの子」ハ
 ろきねたみなど）
 ・雑誌規定、奥附

第三卷第三号 大正二年三月一日発行

・青鞥社研究会（*目次裏。科目及講師は、阿部次郎「哲学史、

文明史、美術史、生田長江「社会学、美学、批評論」、安倍能成「近代思想史」(未定)、岩野泡鳴「刹那哲学」、馬場孤蝶「近代大陸文学の研究」、伊庭孝「近代劇の研究」、石井柏亭、高村光太郎「芸術論(詩、美術、音楽)」(其他)

戯曲 桜の園 (四幕物)

チエホフ 瀬沼夏葉訳 一―三八

逢ふこと (* 短歌) 三ヶ島 霞 三九―四四

ぬれし眼のまま (* 短歌) 岡本 かの 四五―四八

髪 (* 小説) 杉本まさを 四九―七七

一年間 (つづき) らいてう 七八―八五

ホイットマン論 (つづき) エリス 榊 櫻訳 八六―一〇一

愛らしき蛇の女 (* 短歌) 原田 琴 一〇二―一〇六

恋愛と結婚 (承前) エレン・ケイ らいてう訳 一〇七―一一三

・ 四月号予告 一一四

・ 編輯室より (*「青鞥社研究会」の予告や山路愛山に対する反駁

文など) 一一五―一二〇

附録

思想の独立と経済上の独立 (大要)

岩野 清 一―七

男子からする要求 岩野 泡鳴 八一―三二
 婦人のために 馬場 孤蝶 三三一―四五

・ 広告 (* 色別紙。森鷗外訳『ファウスト』へ富山房、小山内薫
 訳『近代劇五曲』へ大日本図書株式会社、平出修『養生道』へ
 山書店、青鞥社編『青鞥小説集』へ東雲堂、石井柏亭、欧洲
 通路』へ同上、『奇蹟』へ植竹書院、など)

第三卷第四号 大正二年四月一日発行

・ 青鞥社文芸研究会会員募集 (* 目次裏。「科目及講師」に島村
 抱月「婦人問題の変遷」加わる)

戯曲 桜の園 (四幕物)

チエホフ 瀬沼夏葉訳 一―五三

はかなき生 (* 短歌) 三ヶ島 霞 五四―六一

東風 (* 小説) 小笠原さだ 六二―七一

髪 (* 小説) 松本 正生 七二―九二

お冬さんの話 (* 小説) 小林 歌津 九三―一〇三

掌の上の恋ぶみ (* 詩) 柴田 かよ 一〇四―一〇八

気色ばむ時 (* 短歌) 岡本 かの 一〇九―一一一

恋愛と結婚 (承前)

エレン・ケイ らいてう 一一二―一二三

ホイットマン論(つづき)

エリス 楠 櫻訳 一二四—一三四

夜の女(*短歌)

原 阿佐緒 一三五—一三七

超脱俗観

上野 葉 一三八—一五五

世の婦人達に

らいてう 一五六—一六四

この頃の感想

伊藤 野枝 一六五—一七〇

・新刊紹介(*小山内薫『近代劇五曲』日本図書株式会社)ほか)

・寄贈雑誌

編輯室より(*青鞥社運動に向けられた世の誤解、非難に対して)

弁駁する章句などあり 一七二—一七四

・広告(*「青鞥社文芸研究会」会員募集、原田琴子『歌集ふるへ

る花』岡村盛花堂、平塚明子『圓窓より』東雲堂、岡稻

里歌集『早春』同上、三宅雪嶺『明治思想小史』鶏声

堂、『新文林』忠誠堂など)

第三卷第五号 大正二年五月一日発行

戯曲 桜の国(四幕物)

チエホフ 瀬沼夏葉訳 一—一二二

新らしき幸ある国へ(*小説)

シエンキウツチ 増田 初訳 二三一—四〇

未来の王国(*小説)

アナトール・フランス 浅野 友訳 四一—五三

銀笛の悲しみ(*小説) 人見 直 五四—八四

響の影(*小説) マツコア 伊藤野枝訳 八五—一二〇

河岸(*小説) 小林 歌津 一二一—一二九

うすぐみ(*短歌) 三ヶ島 葎 一三〇—一三九

死に行くみち(*短歌) 深見 よし 一四〇—一四三

鬚のびし男(*短歌) 原田 琴 一四四—一四五

青鞥社詠草(*短歌。青木櫻・岩淵百合・原阿佐緒・岡本かの)

・六月号予告 一四六—一五二

・社告(*青鞥社事務所移転—府下巢鴨町字巢鴨一六三—)

・寄贈雑誌 一五三

・寄贈書目 一五四

・新刊紹介(*錦田義富訳『ベルグソンの哲学』警醒社、イブ

セン千葉桐香訳『蘇生の日』ヘッダ・ガブラア『建築師』警

醒社) 一五五—一五六

・広告(*英文タイプ及び速記教授 高田真琴) 一五六

一五七

一五七—一五八

一五八

一五八

附録

恋愛と道徳 (* 論文)

エレン・ケイ 伊藤野枝訳 一一 四六

・ 広告 (* 色別紙。平塚明子「圓窓より」ハ東雲堂、
『青鞨小説集』ハ東雲堂、「白樺」、「奇蹟」など)

・ 雑誌規定、奥附 (* 発行所青鞨社の住所変更。欄外下に「本号
特価金四十銭」とある)

第三卷第六号 大正二年六月一日発行

暮春 (* 短歌) 岡本 かの 一一 四

囚はれ人 (* 短歌) 三ヶ島 葭 五一 一二

泣かされる引眉——或女に—— (* 短歌) 柴田 かよ 一三一 一八

戯曲 イワノフ (四幕もの) チエホフ 瀬沼夏葉訳 一九一 三五

響の影 マッコア 野 枝訳 三六一 八二

恋愛と結婚 (続き) エレン・ケイ らいてう訳 八三十一 九三

未来の王国 (つゞき) アナトール・フランス 浅野 友訳 九四一 一〇八

新らしき幸ある国へ (二) シエンキウイッチ 増田 初訳 一〇九一 一一五

扇ある窓にて (* 感想) らいてう 一一六一 一二三

編輯室より (* 社への脅迫状の紹介、「圓窓より」発禁のこと其他) 一二四 一二六

・ 五月号正誤表 一二六 一二八

・ 寄贈雑誌 一二八

・ 寄贈書籍 一二八

・ 雑誌規定、奥附

・ 移転広告 (* 東雲堂——日本橋禮物町九へ)

第三卷第七号 大正二年七月一日発行

うき人 (* 短歌) 三ヶ島 葭 一一 三

哀しき夏の夜 (* 短歌) 武山 英 四一 七

星の澄める夜 (* 短歌) 白川 智恵 八一 一三

泣きぬれし友の眸 (* 短歌) 柴田 かよ 一四一 一七

齒のなやみ (* 短歌) 岡本 かの 一八一 二二

菖蒲の家と姉 (* 小説) 水野 仙 二三一 三〇

朝霧 (* 小説) 杉本まさを 三一 五三

戯曲 イワノフ (四幕もの) チエホフ 瀬沼夏葉訳 五四一 七三

響の影 マッコア 野 枝訳 七四一 一六

未来の王国 (つゞき)

アナトール・フランス 浅野 友訳 一七七一—二四
恋愛と結婚(続き)

エレン・ケイ らいてう訳 一二五—一三五
染井より(*書簡。青翰社に対する俗論について)

野 枝 一三六一—一四〇
編輯室より(*同人消息、『圓窓より』発禁の理由其他)

・六月号正誤表

・寄贈雑誌

・寄贈書籍

・広告(*色別紙。らいてう『肩ある窓にて』——『圓窓より』の改

訂版——八東雲堂V、「スバル」など)

・雑誌規定、奥附

第三卷第八号 大正二年八月一日発行

戯曲 イワノフ	チエホフ	瀬沼夏葉訳	一一	二六
家なき身(*小説)	藤岡一枝(*物集和子)		二七	三九
小説(*小説)	小林 歌津		四〇	四九
富田浜にて(*短歌)	柴田 かよ		五〇	五五
ほぼづき(*短歌)	岡本 かの		五六	六一
うつらくと(*短歌)	青木 穰		六二	六五

北の郊外より(*伊藤野枝宛書簡)

岩野 清 六六一—七一
性的道德発展の過程(*「恋愛と結婚」の続稿)

エレン・ケイ らいてう訳 七二—八六
動揺(*小説。作者と辻潤、木村莊太との關係を描いたもの)

野 枝 八七一—一九四

編輯室より

・新刊紹介(*正宗白鳥「心中未遂」八植竹書院V、島村抱月『影

と影』八同上Vほか)

・二週年紀念号予告

・雑誌規定、奥附

・広告(*色別紙。「生活と芸術」創刊号八東雲堂V、「スバル」な
ど)

第三卷第九号 大正二年九月一日発行

小曲二章(*詩)	茅野 雅	一一	二
涙(*短歌及び感想)	原 あさを	三一	八
をぐらき夏(*短歌)	白川 智恵	九一	一三
ふるさと(*短歌)	岡本 かの	一四	一七
いづちゆくべき(*短歌)	三ヶ島 葎	一八	二〇
戯曲 イワノフ(四幕もの)			

花、「新文林」、「モザイク」、「詩歌」、「生活」など

附録

婦人解放の悲劇 (* 論文。訳者無署名なるも伊藤野枝と推定される) エンマ・ゴルドマン 一一一—一五

恋愛の進化 (* 論文) エレン・ケイ らいてう訳 一六一—二六

・ 広告三 (* 色別紙。「らいてう」^{とぎし}「扇ある窓にて」^{まひ}へ東雲堂、^{まひ}「生活と芸術」、「アララギ」、「創造」モンナ・ヴンナ号、「スバル」など)

・ 雑誌規定、奥附 (* 欄外下に「本号特価四十銭」とある)

第三卷第十号 大正二年十月一日発行

戯曲 イワノフ (四幕もの) 瀬沼夏葉訳 一一—二〇

灯をば細めて (* 短歌) 岡本 かの 二一—二四

夕靄の中の街の灯 (* 短歌) 柴田 かよ 二五—三〇

旅の歌 (* 短歌) 岩淵 百合 三一—三六

響の影 マツコア 野 枝訳 三七—六一

朝露 (* 小説) 杉本 正生 六二—一〇四

芸術と春 (* 小説) 加藤 緑 一〇五—一二五

恋愛の進化 (つゞき)

エレン・ケイ らいてう訳 一二六—一三三

チエホフ 瀬沼夏葉訳 二一—三六

マツコア 野 枝訳 三七—四九

加藤 籐 五〇—五九

安田 皐月 六〇—八二

小林 歌津 八三—九八

岩野 清 九九—一六

奥村博史との関係について

らいてう 一一七—一二九

矢沢 孝 一三〇—一三五

柴田 かよ 一三六—一四二

青木 穠 一四三—一四六

岩淵 百合 一四七—一四八

岡田八千代 一四九—一六八

西崎 花世 一六九—一七五

柴田 かよ 一七六—一八二

一八三

編輯室より

・ 新刊紹介 (* バルフインチ 野上弥生子訳「伝説の時代」へ尚文堂、北原白秋「東京景物詩」へ東雲堂、「啄木遺稿」へ同上)

・ 十月号予告 ほか 一八四—一八五

・ 広告一 (* 東雲堂蔵版書目) 一八六

・ 広告二 (* 色別紙。魯庵訳「罪と罰」へ丸善、^{まひ}「創作」、「心の

芸術座の初演を見て（*劇評。メーテルリンクの「内部」と「モ
ンナ・ブナ」について） 木 兔 女 一三四—一三五

編輯室より（*はじめに「……いよいよ社の規則が変更いたしました

した。（本社規則参照）そして在来の社則によつた社員をま
づ全部解散し、新社則のもとに新しく、改めて入社を申込んで
いたゞくことにしたのです。今迄のよりも社員は或意味で狭い
ものになり、又責任の重いものになりました。只文学愛好の女
子ならば、そして一定の社費さへ納めていればいいといふやう
なものではなく、又浅薄な寧ろ軽卒な者から入社し、周囲の攻
撃がひどいからといつてすぐ退社するようなそんな自信のない
ものではなく、少なくとも本社の精神やその仕事に自己の生命
を見出し、社と共に自己を成長させて行かうとする人でなければ
ならないのです。ずつと社と深い、親しい関係を有つたもの
としたのです。そして青鞥はそれらの人の思想及生活を發表す
る機関となるのです。」の一項あり、その他補助団の設立と団
員の募集、同人消息および茅原華山のらいてう宛葉書の紹介な
ど）

・青鞥社概則（*補遺1参照） 一三八—一三九

・青鞥社新社員（*補遺2参照） 一三九

・現在係員（*補遺3参照） 一三九

・青鞥社補助団規約（*補遺4参照） 一四〇

・補助団員名簿 一四〇—一四一

・寄贈書籍紹介（*河井醉茗著「少女物語なゝ姫」ハ同文社V、意表

著「恋の真理」ハ地球堂Vほか） 一四一—一四二

・寄贈雑誌 一四二

・会員募集（*別紙折込。補助団規約及び入会申込書）

・広告（*色別紙。「独歩詩集」ハ東雲堂V、斎藤茂吉「赤光」ハ同
上V、「生活と芸術」、「スバル」、「近代思想」、「アララギ」、
「創作」、「創造」、「新文林」、「心の花」など多数）

・雑誌規定、奥附

補遺

1 青鞥社概則

第一条 本社は女子の覚醒を促し、各自の天賦の特性を發揮せし
め、他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二条 本社を青鞥社と称す。

第三条 本社の事務所を東京府下巢鴨町一一六三に置く。

第四条 本社は係員、社員、賛助員よりなる。

第五条 本社の目的を達する為め左の事業をなす。

一、毎月一回機関誌青鞥を發刊すること。「青鞥」には係員、
社員、賛助員の生活思想を發表す。（但し補助団員の寄稿を
發表することあるべし）

一、図書出版。

一、時々係員、社員の修養研究会、並に事業上の相談会を開く
こと。（但し賛助員は出席随意たるべし）

一、毎年一回大会を開くこと、大会には賛助員を招待し講話を
請ふことあるべし。

一、時に旅行を催すこと。

一、本社の事業を達するため別に補助団を組織す。

第六条 係員、社員、賛助員は女子に限る。

第七条 係員は本社の目的に賛同するのみならず、本社の事業を自己の生命とするものにして専ら幹部にありて、直接本社の事業に従事し、自己にその責任を負ふものとす。係員は毎月「青鞥」の配布を受く。

第八条 係員は在京社員より選挙す。

第九条 係員は四人とし、内二名は経営に、他の二名は編輯に従事す。

第十条 毎年九月在京社員會議を開き、係員を改選す。但し再選する事を得。

第十一条 係員には本社の經濟の許す限りは其努力に対して多少の報酬をなすものとす。

第十二条 社員は本社の目的に賛同するのみならず本社の事業を自己の生命とするものにして雑誌「青鞥」の配布を受く。

第十三条 社員たらむことを希望する者は住所、姓名、年齢の外に履歴の大体と現在の境遇と入社の際に十枚以上の原稿と（小説、戯曲、感想、詩歌、評論、翻訳いづれにてもよろし）最近の写真とを添へ本社宛申し込まるべし。

第十四条 賛助員は本社の目的に賛同し、雑誌「青鞥」に寄稿することを快諾せられたる文壇の諸先輩とす。賛助員は毎月青鞥の配布を受く。

第十五条 本社の事業を經濟的方面より助力するものを補助団員とす。

第十六条 補助団員は補助団規約によつて募集す。

2 青鞥社新社員

岩野清、伊藤野枝、岩淵百合、林千歳、西崎花世、小笠原貞、岡本かの、片野珠、保持白雨、牧野君江、小林歌津、青木穠、浅野友、坂本真琴、三ヶ島よし、柴田かよ、平塚明。

3 現在係員

庶務會計主任 保持白雨
編輯主任 平塚明
同 補佐 伊藤野枝、小林歌津

4 青鞥社補助団規約

一、青鞥社補助団は青鞥社の事業を完成せしめんがために經濟上の補助をなすを以つて目的とす。

二、本団は其目的を遂行せむがために理事一名、外に會計主任及係員を置き一切の業務を処理せしむ。

三、本団は左の方法により九月一日より同月卅日迄第二期會員募集をなす。

1、甲種會員 一ヶ月会費 壹圓

2、乙種會員 一ヶ月会費 五拾錢

四、本団の會員たらむとするものは其目的に賛同し、第三条の会費を入会の日より満式ケ年間納むるものとす。

（但し会費領収は青鞥紙上に発表し、別に領収書を出さず）

五、本団は會員に対し青鞥社発行の機関誌「青鞥」を毎号贈呈す。

六、甲種會員には会費全納後なほ満二ケ年間は雑誌「青鞥」と青鞥社出版圖書とを其都度贈呈す。

七、乙種会員には滿二ヶ年間雜誌青鞆のみを贈呈す。本団会員は甲種なると乙種なるとに拘らず、女子に限りて「青鞆」に寄稿し得るの特権を有す。

但し寄稿が二回以上「青鞆」紙上に掲載されたる場合は本人の希望により相当の手續き（青鞆社規則参照）を経て青鞆社の社員たる事を得。

八、入会申込者は期日内に左の書式により府下巢鴨町、一六三青鞆社内青鞆補助団宛に申込まれたき事。

会費は毎月五日迄に同じく本団宛便宜の方法を以つて払込まれたき事。（但し郵便切手は一割増）

九、在京会員のみは本団より集金人を差向くる管。会費は大凡三ヶ年間確実なる銀行に預金し、其後に於て全金額を青鞆社に寄附するものとす。

一〇、会計報告は年一回以上便宜の方法を以て会員に発表す。

一一、この規約は理事、会計主任、係員によつて事務の細目を定め、又会員多数の意見によりて変更する事を得。

大正二年九月廿日

理事 保持白雨
 会計主任 岩野 清

第三卷第十一号 大正二年十一月一日発行

・青鞆社補助団員募集（*別紙折込。前号のものと同じ）

なげき（*短歌） 岡本 かの 一 一四

三つの夢（*小品）

オリブ・シユライネル 山田わか訳 五 二〇

うすさむ（*戯曲） 小林 歌津 二 一四

九月の作の中より（*短歌） 柴田 かよ 四 六一 五二

少数と多数（*論文。訳者は無署名だが伊藤野枝である）

エンマ・ゴルドマン 五 三一 六四

自己の或る心に与ふ（*感想） 西崎 花世 六 五一 七二

北の郊外より（*感想） 岩野 清 七 三一 七七

束の間の明るみ（*短歌） 白川 智恵 七 八一 八一

「動搖」に現はれたる野枝さん（*評論）

らいてう 八 二一 一〇一

青鞆社詠草（*短歌。三ヶ島霞他） 一〇 二一 一〇九

ソニヤ・コヴァレフスキイの自伝

野上弥生子訳 一一 〇一 一一九

編輯室より（*発売所の変更、同人消息、新入補助団員の紹介其他） 一一 〇一 一一〇

紹介（*奥村博画会、独歩遣児後援会資金募集、巡礼詩社の創設） 一一 〇一 一一一

・青鞆社新社員名簿（*前号所載のものに上野葉が加わる） 一一 〇一 一一二

・補助団会員名簿 一一 〇一 一一三

・十月号寄贈雑誌

・寄贈書籍

・社告（*係員の面会日変更）

・青鞆社概則（*別紙）

・青鞆発売所変更（*別紙。「神田区南神保町十六番地尚文堂書店」となる）

・広告（*色別紙。「創造」、「アララギ」六巻一、二号・伊藤左千夫追悼号、「スバル」、「仮面」、「近代思想」など）

・雑誌規定、奥附（*発売所変更）

・裏表紙（*エンマ・ゴルドマンの言葉を英文で掲ぐ）

第三卷第十二号 大正二年十二月一日発行

・表紙（*意匠変更）

生の神の賜（*オリブ・シユライネルの言葉）

一年間（つゞき）（*小説）

昔の男に対して（*感想）

薄暮の音楽（*詩）

徹底せざる婦人問題に対して（*評論）

わがまま（*小説）

粉雪（*小説）

一一二
一一二
一一二

ソニヤ・コヴァレフスキイ自伝

野上弥生子訳

天日に（*短歌）

青鞆社詠草（*短歌。川田よし他）

戯曲イワノフ（四幕物）

チエホフ 瀬沼夏葉訳 一〇四—一一二

・広告（*色別紙。「生活と芸術」、「モザイク」、「近代思想」、「エゴ」など）

本郷座の孤城落月（*劇評） 木 兎 女 一一三—一一四

市村座の「丁字みだれ」（*劇評）

あ げ は 一一六—一一七

・新刊批評と紹介（*安部能成『予の世界』—らいてう、沼波瓊音『芭蕉の臨終』—野枝、和辻哲郎『ニイチエ研究』—内田老鶴

園V） 一一七—一二一

・新年号予告 一二一

編輯室より（*同人消息、「ウオーレン夫人の職業」に対する感想、批評の原稿募集、補助団新入会員名紹介） 一一一—一二三

・寄贈書籍 一二三

・寄贈雑誌 一二三

・青鞆社概則 一二三

・雑誌規定、奥附

・会員募集（*青鞆社補助団規約を掲載）

わ か 訳

らいてう 二一—二二

西崎 花世 二二—三八

望月 麗 二九—三〇

丸島 春枝 三一—五〇

野 枝 五一—六七

小林、歌津 六八—七四

・ 広告 (* 色別紙。「仮面」など)

第四卷第一号 大正三年一月一日発行

・ 表紙 (意匠変更。以下第四卷第三号まで同じ)

ぬれ髪 (* 小説) 水野 仙子 一 一〇

脱れられぬ人 (* 小説) 川田 よし 一 一一 三一

父 (* 小説) 荒木 郁 三 二一 四〇

風吹く日 (* 小説) 加藤 緑 四 一一 五五

白い火事 (* 小説) 安田 皐月 五 六一 六九

恋愛及生活難に対して (* 感想)

西崎 花世 七 〇一 八四

舞の師匠 (* 詩) 茅野 雅 八 五一 八七

孔雀 (* 詩) 望月 れい 八 八一 八九

ソニヤ・コヴァレフスキイ自伝 野上弥生子訳 九 〇一 一〇二

戯曲 イワノフ (四幕物) チエホフ 瀬沼夏葉訳 一〇 三一 一一八

・ 新刊紹介 (* アーサー・シモンズ 岩野泡鳴訳 『表象派の文学 運動』 新潮社) 一一八

・ 夢 (* 短歌) 三ヶ島 葭 一一 八一 一二四

・ 靈に (* 短歌) 岩淵 百合 一二 五一一 一二七

野枝子の動搖に現れた女性的特徴 (梗概) (* 評論。この号 未完であるが、筆者の病気で続稿は掲載されず)

小倉清三郎 一二八一—一四〇

編輯室より (嘉悦孝女史に) * 国民新聞所載、同女史の『男子貞操論』批判—岩野清、「武者小路氏に」* 武者小路の野枝評に対する再論—野枝、「こんな頭」* 自己の心境をのべ、奥村博史との関係に及ぶ—らいてう、「野上氏の『指輪』」* 『中央公論』大正二年一月号所載の同作品評—野枝、其他) 一四一—一四七

・ 寄贈雑誌 一四七

・ 寄贈書籍 一四八

・ 青鞥社移転 (* 府下巢鴨町一二二七へ) 一四八

・ 社告 (* 年賀の挨拶)

・ 青鞥社概則

・ 雑誌規定、奥附

・ 青鞥社補助団規約

・ 広告 (* 色別紙。「我等」創刊号、「帝國文学」、「近代思想」、「アララギ」、「エゴ」二巻一号・ゴオホ号、「心の花」、「創造」

「生活と芸術」など)

附録 ウォーレン夫人の職業合評

・ 写真 (* Mrs. Warren とある。ウォーレン夫人に扮した女優の 写真と推定)

ギギーとその母の生活 (* 評論)

らいてう 一〇二―一〇一

・写真 (* Viva とある。ギギーに扮した女優の写真と推定)
ウォーレン夫人とその娘 (* 評論)

野 枝 一〇二―一〇一

ギギーの生活に対する雑感 西崎 花世 一九一―二〇六

「ウォーレン夫人の職業」をみて (* 同戯曲は大正三年二月、
とりて社により有楽座で上演された)

K I 二七―二九

・広告 (* 色別紙。ショウ・堺利彦訳『人と超人』八丙午出版社V
など)

第四卷第二号 大正三年二月一日発行

・写真 (* 青鞥社同人―らいてう、保持白雨、荒木郁、中野初、岩
野清、小林歌津、岩野宅に於ける新年会席上で撮影)

詠草の中より (* 短歌)

柴田 かよ 一―五

雪 (* 短歌)

三ヶ島 霞 六―一

ソニヤ・コヴァレフスキの自伝

野上弥生子訳 一〇二―一〇七

梅のほひ (* 戯曲)

小林 歌津 二八―四六

吾が生きかた (* 感想)

西崎 花世 四六―六〇

電灯 (* 詩)

別後 (* 短歌)

戯曲 イワノフ (四幕物)

チエホフ作

出奔 (* 小説)

野 枝 八二―一〇一

独立するに就いて両親に (* 奥村博史との共同生活開始に際して
両親に対し自己の所信を述ぶ)

らいてう 一〇二―一〇六

編輯室より (* 青鞥社新年会の報告、同人消息―らいてう、加藤

緑、荒木郁―其他)

一〇七―一〇〇

・寄贈書籍

・新年号寄贈雑誌

一〇〇

・読んだものゝ紹介 (* 武林夢想庵訳『サニン』上巻、植竹書
院V)

一〇〇

・雑誌規定、奥附

・青鞥社補助団規約

・公告 (* 色別紙。平塚明子の転居通知―府下東鴨町三ノ三八)

・広告 (* 色別紙。帝国文学、「珊瑚」、「心の花」、「新思潮」復

興号・二月一日発行、「生活と芸術」、「エゴ」、「近代思想」、

メレジュコフスキー 森田草平、安部能成共訳『人及芸術家と

してのトルストイ並にドストエフスキー』八玄黄社Vなど)

第四卷第三号 大正三年三月一日発行

ソニヤ・コヴァレフスキの自伝

野上弥生子訳

一 一六

「火の娘」を読んで（* 荒木郁創作集に対する批評）

らいてう

一七一 二四

真をしたひて（* 感想。生田春月との関係についての言及がある）

西崎 花世

二五一 四九

阿古屋茶屋（* 小説）

国分まさを

五〇一 七四

夜のふね（* 詩）

望月 れい

七五一 七七

あの人（* 詩）

原田 琴

七八一 八三

美しき獄（* 小説）

荒木 郁

八四一 九七

小鳥よ（* 短歌）

青木 穠

九八一 一〇〇

林檎（* 短歌）

三ヶ島 霞

一〇一一 一〇四

火事（* 短歌）

白 雨

一〇五一 一〇七

古郷にてうたへる（* 短歌）

柴田 かよ

一〇八一 一一〇

従姉に（* 書簡体感想。郷里出奔をめぐる自己の心境）

野 枝

一一一 一一九

「婦人解放の悲劇」に就て（* ケイ及びゴルドマンの論文の翻訳出版に際しての感想）

野 枝

一二〇 一二三

・ 広告（* 色別紙。「生活と芸術」、「我等」、「番紅花」創刊号、「エゴ」など）

野 枝

一二五

・ 予告（* 四月小説号）

一二六

編集室より（* 四月号の内容、同人消息、最近の感想―加藤みどり・伊藤野枝、「月光」所載の小島康治「姦通罪を廃止すべし」についての感想―らいてう・其他）

一 二七一 一三〇

・ 書籍紹介と批評（* ハベロツク エリス・小倉清三郎訳『性的特徴』ハ丁未出版社V―らいてう、鶴田薫『婦人の心得べき法律』ハ雄弁会V―らいてう、「未来」ハ東雲堂V、エレン・ケイ

本間久雄訳『婦人と道徳』ハ南北社V、モオパッサン 水上斎

訳『兄と弟』ハ植竹書院V）

一 三二一 一三三

・ 青鞥社概則

雑誌規定、奥附（* 青鞥社住所変更―府下巢鴨町字巢鴨一二二七）

・ 青鞥社補助団規約

・ 広告（* 色別紙。野枝訳『婦人解放の悲劇』ハ東雲堂V、「アララギ」、「帝国文学」、「仮面」、「創造」、「近代思想」など）

第四卷第四号 大正三年四月一日発行

（* 小説特輯号）

・ 表紙（* 意匠変更。奥村博史の版面。以下第四卷第八号まで同じ）

田草とり

山田 わか

一一 八

新らしき生命

野上弥生子

九一 二七

合奏

紅き木の芽

蝙蝠

京人形

夜汽車

佐渡節

別れての二三日

惑ひ

国分まさる 二八一 七〇

川田 よし 七一 八四

浜野 ゆき 八五 九七

松井 静代 九八 一〇〇

斎賀 琴 一一一 一三五

安田 臯月 一三六 一六八

加藤 緑 一六九 一九一

野 枝 一九二 二〇三

編輯室より (小説号について、伊達虫子さんの紹介、徳田秩江氏

と平出修氏*その婦人観批判、報告其他)

二〇四 二〇六

・寄贈雑誌

・寄贈書籍

・広告

・青鞥社概則

・雑誌規定、奥附 (*欄外下に「特価四十銭」とある)

・青鞥社補助団規約

・広告 (*色別紙。国民文庫刊行会『泰西名著文庫』、「生活と芸

術」、「近代思想」、「心の花」、「我等」、「仮面」、「創造」、「帝國

文学」、「都会芸術」創刊号へ植竹書院Vなど)

附録

女性間の同性恋愛 (*論文。らいてうの序言を附す。訳者は野枝

とは別人) エリス 野 母訳 一 二四

・広告 (*色別紙。「自由講座叢書」へ尚文堂V、「反響」四月創刊

号、「アララギ」、魯庵「沈野の饒舌」へ丙午出版社V、「番紅

花」など)

第四卷第五号 大正三年五月一日発行

男女恋愛の差別 (*エレン・ケイの言葉。訳者無署名) 一

ねえ、赤さま (*詩) 弥 生 二 四

卜者の言葉 (*小説) 加藤 緑 五 二一

西川文子氏の「婦人解放論」を評す らいてう 二二 二八

西川文子氏の「婦人解放論」を読む 野 枝 二九 三六

戯曲 イワノフ (四幕物) チエホフ 瀬沼夏葉訳 三七 五七

得たる『いのち』(感想) (*生田春月との交渉をめぐって。春月

よりの手紙の引用あり) 西崎 花世 五八 七一

山を去りて (*短歌) 三ヶ島 葎 七二 七三

糸のもつれ (*戯曲) 小林 歌津 七四 九〇

ソニア・コヴァレフスキイの自伝 野上弥生訳 九一 九九

お前の日記 (* 詩) 伊達虫子 (* 岡田八千代) 一〇〇—一〇四
 思つてゐる事 (* 感想。自己の生活及び結婚について)

岩野 清 一〇五—一〇九
 読んだものの評と最近雑感 (* 一木文相の婦人観について、ほか)
 一〇—一〇六

編輯室より (* 社の発起人であつた木内鏡、物集和子、中野初、
 保持研子の創刊以後の動静及び保持の事務主任辞任の事情。内
 部の組織変更の結果「編輯はらいてう、野枝。補助団の経営、
 事務は岩野清氏、らいてう」となる。その他同人消息など)

青鞥社補助団員名簿 (* 補遺参照) 一一九
 寄贈雑誌 一一九
 寄贈書籍 一一九
 青鞥社概則

雑誌規定、奥附 (* 発売所東京堂に変更)
 青鞥社補助団規約
 「青鞥」発売所変更

広告 (* 別紙。「番紅花」、「創造」、上司小剣「鱧の皮」ハ創造
 社V、「心の花」、「仮面」、「帝国文学」二十卷五号・新進作家
 号、「エゴ」、「我等」、久津見巖村著『ニイチエ』ハ丙午出版
 社V、「近代思想」など)

補遺
 青鞥社補助団員

甲種会員 (入会順)

小林哥津、山田須美、岩淵百合、松井静代、青木櫻、岡本かの、北
 村蕾匂、柴田かよ、片野珠、加藤霽、安田皇月、平塚明、辛島キミ
 木村政、保持研、矢沢孝、伊藤野枝、高橋鶴枝、西端さかえ

乙種会員

坂本真琴、浜野雪、中村はる、斎賀琴、山田わか、森下てる、丸島
 白百合、加藤みどり、国分正生、市原次恵、青井暎、猪野武、三浦
 ふくろ、瀬川ちか、清川二葉、後藤静代、真田さよ、伊藤智恵、瀬
 沼夏葉、伊草武良、籬良、望月れい、鈴木香

第四卷第六号 大正三年六月一日発行

目次 (* 「六月革新記念号」とある)

恋愛の自由 (* 論文。訳者無署名)

エレン・ケイ 一—五

美しい仲 (* 小説)

岩野 清 六一—三一

人と別れて (* 短歌)

三ヶ島霞子 三二—三三

万人は如何ともあれ (* 短歌)

斎賀 琴 三四—三五

S先生に (* 書簡体感想)

野 枝 三六—四八

歡喜の失踪 (* 小品)

オリブ・シユライネル 山田わか訳 四九—五六

結婚 (前号の続) (* 生田春月との往復書簡及び感想)

西崎 花世 五七—七八

枕草紙現代語訳抄 (* 初めに訳者の清少納言評伝を附す)

上野 葉 七九— 九四

黙想 (* 小感及び短歌三首) 青木 穰 九四

やみのうち (* 詩) 望月 れい 九五— 九七

田村俊子氏の『烙印の刑』の童子に就いて (* 『読売』所載森

田草平の同作品評に対する批判を含む)

らいてう 九八— 一〇五

ソニヤ・コヴァレフスキイの自伝

野上弥生子訳 一〇六— 一一五

青鞆社詠草 (* 短歌。原田琴他) 一一六— 一二九

「惟然坊」を見て (旅にある父への文の一つ) (* 劇評と感想)

歌 津 一二〇— 一二二

最近の感想 (「婦人の生活を重じない社会」らいてう、「読んだも

のから」* 『創造』大正三年五月号所載の中沢臨川「天才と永遠

の女性」* 『婦人評論』大正三年五月号所載の早川鉄治「現代の

婦人生活」評—野枝、「青葉の頃」みどり) 一二三— 一三一

・御断り (* 時事新聞記者の「平塚明子女史遂に母となる」とい

う捏造記事の与えた誤解に対する平塚明子の断り状) 一三一

編輯室より (* 社の経営を書店から独立させること、同人消息其

他) 一二二— 一三三

・寄贈雑誌 一三三

・寄贈書籍 一三三

・「青鞆」社発売所変更 (* 前号のものと同じ) 一三三

・青鞆社概則

・青鞆社補助団規約

・雑誌規定、奥附

・広告 (* 別紙。「生活と芸術」、「俳味」、「アララギ」、「帝国文

学」、「心の花」、「創造」、「新思潮」六月号—「五月号発売禁

止」とある、「近代思想」、「未来」、「番紅花」、「我等」、「仮面

「エゴ」、「反響」など)

第四卷第七号 大正三年七月一日発行

・題言 (* 『三太郎の日記』の一節)

ソニヤ・コヴァレフスキイの自伝

野上弥生子訳

ためらひ (* 短歌)

女ばかり (喜劇)

恋愛の自由

下田次郎氏に——日本婦人の革新時代に就いて—— (* 感想。下

田次郎『日本婦人の革新時代』^「婦人評論」Vに対する反駁)

芸術家の秘密 (* 小品)

シユライネル わか訳

一〇六

夏木立 (* 短歌)

矢沢 孝

一〇七

夏の花 (* 短歌)

斎賀 琴

一〇八

最近の感想 (「七日間の旅」らいてう、「巢鴨村より」岩野清、「五月雨の日に」みどり)

一〇九—一一六

・ 広告 (* 「フランス語の会」岩野清宅において)

・ 転居 (* 青鞥社及び平塚明一府下巢鴨上駒込四一—妙義神社前へ)

編輯室より

一一九

消息 (* 従来「編集室より」の中に一括されていた同人消息、諸種の催しの案内などを本号ではこの項にまとめた。内容は、

青鞥社移転、仏語講習会及び未来社主宰音楽会の開催其他)

一一九—一二〇

・ 寄贈雑誌

一二〇

・ 寄贈書籍

一二〇

・ 青鞥社概則

・ 青鞥社補助団規約

・ 雑誌規定、奥附 (* 青鞥社住所変更)

・ 広告 (* 別紙。田岡嶺雲「敦奇伝」ハ玄黄社V、「帝国文学」、「創造」、「国民文学」窪田空穂主宰、「我等」、「文芸復興」、「エゴ」

「近代思想」、「番紅花」、「仮面」、「心の花」、「新思潮」など)

第四卷第八号 大正三年八月一日発行

ソニヤ・コヴァレフスキの自伝

野上弥生子訳

一一—二六

まよひ (* 短歌)

三ヶ島 葭

二七—二八

真実の光 (* 短歌)

岩淵 百合

二九

「性」について (離婚せる四十女の思ひ切つた告白を読んで)

(* デンマークの女流作家カリン・ミハエリスの小説「原題」危険なる年齢」小野秀雄訳)を読んでの感想)

上野 葉

三〇—四九

恋愛の自由 エレン・ケイ (* 訳者無署名)

五〇—六五

暗中より (* 短歌)

斎賀 琴

六六—六七

森田草平氏に——「炮烙の刑について青鞥記者にあたふ」を読んで—— (* 本誌第四卷第六号所載の平塚文に対する森田草平の

反駁)「反響」大正三年七月号に答えたもの)

らいてう

六八—八六

広がる愛 (* 感想)

生田 花世 (* 西崎花世。生田

春月との結婚のため改姓)

最近の感想 (* 「エゴ」所載千家元麿の戯曲「家出の前後」及び「婦人評論」の黒岩周六文「英国選挙婦人に同情す」読後感)

野枝、自己の心境と地方に於ける婦人観の一端—房枝、一地方婦人の手紙の紹介及びそれへの感想、「朝日」掲載安河内警保局

長談について—らいてう)

九六—一〇三

編輯室より (*本号及び九月紀念号の編輯について、補助団員の

募集中止、社の名を不当に利用する女性についての警告其他。

末尾に「らいてう」の署名あり) 一〇四—一〇五

・新刊紹介 (*西沢富則 賞谷晴一共訳『文学上及医学上より観

たる中年の女』△二舎書房▽、藤森成吉『波』△中興館書房▽、

田村俊子『木乃伊の口紅』△牧民社▽ほか)

・寄贈書物

・寄贈雑誌

・雑誌規定、奥附

・青鞥社概則

・広告 (*別紙。「自画像」八月号など)

第四卷第九号 大正三年十月一日発行

(*本号は「三週年紀念号」なお九月は休刊した)

・表紙 (*意匠変更。奥村博の木版画。写真参照。以下第四卷第一号まで同じ)

個人主義の家庭 (*論説)

岩野 清 一— 六

母権 (*論文) エレン・ケイ らいてう訳

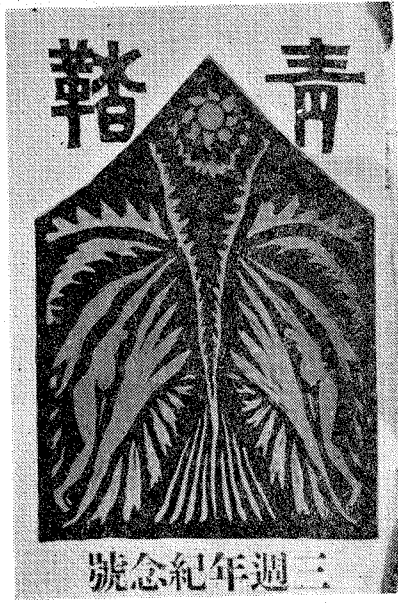
七— 二二

手児奈 (*戯曲) 時雨 (*長谷川時雨)

二三— 四五

紫玉 (*小説)

プシプシエフスキイ 瀨沼夏葉訳 四六— 五〇



朝顔 (*詩)

望月 れい 五〇

獵人 (*小説)

シュライネル

山田わか訳 五一— 六三

下田歌子女史へ (*評論)

野 枝 六四— 七二

ゆくものよ (*短歌)

川田 よし 七三— 七四

不平 (*短歌)

岩淵 百合 七五— 七五

微風 (*短歌)

三ヶ島 葎 七六— 七九

未練 (*短歌)

斎賀 琴 八〇— 八一

待ち侘び (*小説)

林 千歳 八二— 八九

あかきの一家 (*小説)

小林 哥津 九〇— 一〇三

おはれしもの (*詩)

望月 れい 一〇三— 一〇三

遺書の一部より (*小説)

野 枝 一〇四— 一一〇

ソニヤ・コヴァレフスキイ (*訳者の序言に「ソニヤ・コヴァレフスキイの自伝は前号で終りましたが、その以後の伝記は彼女の友人で、ストツクホルムの有名な閨秀作家なる、アン・シャーロット・レフラーに依つて書かれてゐます。このアン・シャーロットは後年ソニヤをストツクホルム大学の数学教授に招聘した同大学の学長ミッタツハ・レフラーの妹で、かのエレン・ケイなどとも親しい友達でありました。云々」とある)

野上弥生子訳 一一一—一二九
山と海と (日記) 川田 よし 一三〇—一三八
嫉妬の意識 (日記) 生田 花世 一三九—一四九
安河内警保局長の意見に就て (*感想) 岩野 清 一五〇—一五一

新しい女のために——警保局長の意見といふをきゝて—— (*感想) 上野 葉 一五二—一五八
最近の感想 (第三週年に際して)「らいてう」、「嘉悦女史の西洋の廢物について」蒲原房枝、「牡丹刷毛」*松井須磨子作—を讀んで「哥津」 一五九—一七一

編輯室より (*九月休刊の事情其他。末尾に「らいてう」の署名あり) 一七二—一七三
消息 (*野上弥生子、伊藤野枝、小野—保持—研子の消息、奥村博個展、「新潮文庫」発刊など) 一七三—一七四
・寄贈書籍

・寄贈雜誌

自由講座會員募集 (*講義題、講師は「近代批評史 生田長江氏」「西洋劇壇の現状 小宮豊隆氏」「近代文学主潮 片上伸氏」「美術新傾向 斎藤興里氏」「ベルグソンの哲学 中沢臨川氏」「舞台建築の研究 後藤鶏尾氏」「近代文学に描かれる戦争 馬場孤蝶氏」「オスカー・ワイルド 平田禿木氏」 一七四
・雜誌規定、奥附 (*欄外左下に「特価三十五銭」とある)
・青鞥社概則
・廣告 (*別紙。奥村博作品油画展覧会、「近代劇物語」^日本圖書Vなど)

第四卷第十号 大正三年十一月一日発行

人形 (*詩) 望月 れい 一—三
紫玉 プシブシェフスキイ作 瀬沼夏葉訳 四—一〇
旅の附録 (*小説) 米川 文子 一—三
山のおもひで (*短歌) 三ヶ島 葭 三九—四一
獵人 (つゞき) 山田わか訳 四二—四九
御宿より (*野枝宛の漁村生活の報告) らいてう 五〇—五八
達磨さま (*小説) 泉 月 五九—八七
山と海と (*短歌) 川田 よし 八八—一〇一
わかれ (*感想) 斎賀 琴 一〇二—

人間と云ふ意識 (*感想) 野 枝 一〇三—一〇八

結婚に就いて両親へ (*感想。目次には筆者名岡田わかとある) 岡田 ゆき 一〇九—一一〇

松本悟郎氏に答ふ (*「第三帝国」所載松本文に対する批判) 野 枝 一一一—一一三

編輯室より (*無署名なるも目次に野枝とある。内容は、本号の

編集事情、同人消息、「平民新聞」—大杉栄、荒畑寒村—の発

禁其他) 一一四—一一五

・青鞥社概則

・雑誌規定、奥附

第四卷第十一号 大正三年十二月一日発行

生さる事と貞操と——反響九月号「食べる事と貞操と」を読んで

—— (*批評。「反響」所載生田花世文の批評)

安田 皐月 一一 九

らいてう氏の第二論集発刊に就て (*平塚明著「現代と婦人の生活」ハ日月社Vについで感想)

岩野 清 一〇— 一四

せん切りの香 (*短歌) 柴田 かよ 一五— 一八

習作 (*小説) 牧野 君江 一九— 三〇

繁忙 (*詩) 望月 れい 三一— 三三

はつ秋 (*小説) 浜野 雪 三四— 四二

女郎花 (*小説) 山田 わか 四三— 六〇

母権 (*論文) エレン・ケイ らいてう訳 六一— 七六

再び松本悟郎氏に (*批評) 野 枝 七七— 八四

性的生活と婦人問題 (研究と評論) (一、性的生活の内省的研

究に就て 二、男の恋愛と女の恋愛 三、同時に二人以上を恋し

ても可い場合 *らいてうの「炮烙の刑」評にふれて 四、恋愛

の変化と其変化の隠蔽) 小倉清三郎 八五— 一〇八

雑感 (*継子いじめ、「読売新聞」婦人附録の身上相談、社会主義

者の弾圧などについて) 野 枝 一〇九— 一二

編輯室より (*無署名なるも目次に野枝とある。内容は、同人消

息、「近代思想叢書」ハ天弦堂V発刊のしらせ其他) 一一二— 一一三

・寄贈書籍 一一三

・寄贈雑誌 一一三

・青鞥社概則 一一三

・雑誌規定、奥附 一一三

・広告 (*平塚明「現代と婦人生活」ハ日月社V、「創造」、「反響」

など)

第五卷第一号 大正四年一月一日発行

・表紙 (*意匠変更。奥村博史の絵。以下第五卷第七号まで同じ)

哀調二十章 (*短歌)

三ヶ島 蔚 一 一四

荒れたる礼拝堂 (*小品)

シュライネル

山田わか訳 一五 二五

冬 (*小説)

小林 かつ 二六 四五

女房始め (*小説)

上野 葉 四六 八一

旋頭歌試作

柴田 かよ 八二 八三

成長の後に (*小説)

山田 邦子 八四 九四

死の前の粧ひ (*小説)

安田 皐月 九五 一〇九

青鞆と私—『青鞆』を野枝さんにお譲りするについて— (*社の経営、雑誌編集の全権を野枝に委譲するまでのいきさつ)

らいてう 一一〇 一三九

青鞆を引き継ぐに就て (*青鞆社の歩みに対する感想、自己の立場、及び経営、編輯を引受けるに際して、今後の方針を述べる)

野 枝 一四〇 一五三

折りにふれて (日記より)

岡田 ゆき 一五四 一五七

雑記帳より (*感想)

里見マツノ 一五八 一六〇

感想

出口 郁 一六一 一六二

編輯室より (*本号の編輯について、同人消息其他—野枝、閉店の辞—安田皐月)

一六三 一六四

寄贈書籍

一六五

寄贈雑誌

一六五

雑誌規定、奥附 (*編輯兼発行人は伊藤野枝に、青鞆社住所は

東京市小石川区竹早町八二に改まる。欄外左下に「特価金四拾銭」とある)

・広告 (*別紙。「創造」、らいてう『現代と婦人の生活』など)

附録

ソニヤ・コヴァレフスキ、野上弥生子訳 一 八一

知識の樹の果 (研究) 小倉清三郎 八二 九一

第五卷第二号 大正四年二月一日発行

貞操に就いての雑感 (*感想。「反響」所載生田花世文にふれて)

野 枝 一 一一

冬のうた (*短歌) 斎賀 琴 一二 一四

虎さん (*小説) 山田 わか 一五 二八

年の暮 (*小説) 加藤みどり 二九 四二

妬み (*短歌) 矢沢 孝 四三 四七

ある男の夢 (習作) (*戯曲) 岡田 ゆき 四八 六五

お目に懸つた生田花世さんに就いて (*感想) 原田 皐月 六六 七三

(*安田皐月。原田潤と結婚のため改姓)

野蜂の夢、遙か彼方の世界で、立つて居たと思うた、快樂の園 (*小品。訳者無署名なるも目次には「山田わか訳」とある)

シュライネル 七四 九二

青鞆社詠草 (*短歌。よし子、有田勢伊) 九三 九六

一ぱいの湯の味 (*小説) 牧野 君江 九七一—一〇七
ソニヤ・コヴァレフスキの伝

野上弥生子訳 一〇八一—一一八
小倉清三郎氏に——「性的生活と婦人問題」を読んで—— (*感想)
らいてう 一一九—一二七
手紙 (*伊藤野枝宛) 里見マツノ 一二八—一三〇

編輯室より (*生田花世への希望、同人消息其他)

野 枝 一三〇—一三一

・寄贈書籍

・寄贈雑誌

・雑誌規定、奥附

一三一
一三二

第五卷第三号 大正四年三月一日発行

女子の教育に就いて (*ウオード著『ダイナミック・ソシオロジ
ー』の抄訳) 山田わか訳 一—七

冬の終り (N・Cと呼ぶ婦人より聞きたるまま) (*小説)

山田 邦子 八一—二六

四篇 (*対話。「兄妹の悲しみ」、「電車を待つ間」、「二人の女」、

「ある夫婦」より成る)

岡田 ゆき 二七—三七

真暗にありて——巢鴨にて—— (*短歌)

三ヶ島 葎 三八—四一

(旬日の友 (*小説)
AとK子 (*小説)

女友達 (*小説)

愛する師へ (*書簡体感想)

歌舞伎座の二月 (*劇評。「実録千代萩」、「妹背の門松」、「桜美多
礼」について)

菅原 初 四二—六六
有田 勢伊 六七—七二
川田 よし 七三—七八
千原 代志 八九—九六
岡田八千代 九七—一〇四

編輯室より (*目次には「編輯だより 伊藤野枝」とある)

一〇五

・雑誌規定、奥附

町九二—)

(*発行所青輪社の住所変更—小石川区指ヶ谷

第五卷第四号 大正四年四月一日発行

婦人問題に対する科学の態度——ウオード氏著ダイナミック・

ソシオロジ—より——

ある晩のこと (*小説)

山田わか訳 一—七

懺悔の心より——平塚様、伊藤様、原田様に寄せて—— (*感想)

小林 かつ 八一—八

寂 (*詩)

生田 花世 一九—二八

処女作 (長篇) (*小説)

菅原 初 二九—三六

習作 (*戯曲)

千原 代志 三七—五九

東郷ペン (*感想)

原田 臯月 六〇—七一
岡田八千代 七二—八三

おぼろ夜 (*小説)

有田 勢伊 八四— 九八

最近の感想二つ (*「与謝野晶子氏の『鏡心灯語』について」)

田花世氏に」の二篇)

野 枝 九九— 一〇〇

折にふれて (*感想)

岡田 ゆき 一一一— 一二四

淋しき心 (*小説)

山の井みね子 一一五— 一二二

編輯室より (*同人消息其他)

野 枝 一二三— 一二四

雑誌規定、奥附

・ 廣告 (*『近代思潮叢書』天弦堂)。奥附裏にある)

第五卷第五号 大正四年五月一日発行

不具者の一人 (*小説)

山田 邦子 一一— 二五

昔の愛人に (*小説)

斎賀 琴 二六— 三七

こゝのつゝの頃 (*小説)

浜野 雪 三八— 五六

石のをんな (*小説)

奈々子 (*長谷川時雨) 五七— 七九

処女作 (*小説)

千原 代志 八〇— 一三八

沈丁花 (*小説)

五明倭文子 一三九— 一六二

水神の崇 (*小説)

岡田 ゆき 一六三— 一七九

神性と人間性と恋愛と (*感想)。「帝国文学」所載山田櫛郎文に

ふれて)

原田 皇月 一八〇— 一八八

東郷ペン (その二) (感想) 藤森成吉『波』・新富座の『勸進帳』な

ど・演技座の『サロメ』・「中央公論」四月号の創作・武者小路

『その妹』について、ほか) 岡田八千代 一八九— 二〇九

女性の直覚 (改革家としての婦人——ウオードより) (*論文)

山田わか訳 二二〇— 二二八

苦痛にむかひて (*感想)

生田 花世 二一九— 二二七

虚言と云ふことに就いての追想 野 枝 二二八— 二四七

編輯室より (*らいてうの消息、官憲の婦人選挙運動禁止の意向

について其他)

野 枝 二四八— 二四九

病床より (*雑感)

皇 月 二四九— 二五二

第五卷第六号 大正四年六月一日発行

(*この号発禁となる)

憂鬱の一日 (*小説)

山田 邦子 一一— 一四

Y様へ (*書簡体感想)

山田 わか 一五一— 二〇

東郷ペン

岡田八千代 二一一— 二九

松原より (*短歌)

斎賀 琴 三〇— 三二

獄中の女より男に (*小説) 墮胎問題を扱ったもの)

原田 皇月 三三一— 四五

青畳 (*小説)

五明 倭文 四六一— 六三

灯影 (*短歌)

三ヶ島 葎 六四— 六九

私信——野上弥生子様へ—— (*墮胎についての見解を述べる)

処女作 (*小説)

野 枝 七〇―八一
さくら子 八二―一〇七

編輯室より

一〇八―一一〇
一〇一―一一二

・寄贈書籍紹介

・雑誌規定、奥附 (*裏に広告あり)

第五卷第七号 大正四年七月一日発行

児童の世紀 (*論文)

エレン・ケイ 山田わか訳 一―一四

真実の心より (*小説)

浜野 雪 一五―四〇

断章 (*詩)

斎賀 琴 四一―四三

処女作

千原 代志 四四―五四

幕間になる迄 (*戯曲)

岡田 ゆき 五五―六四

獣性と人間性とに就いて (*論文)

青嵐

原田 皐月 六五―七三
五明 倭文 七四―八九

五月の未より六月へかけての芝居 (*劇評。新時代劇協会の『街

の子』『銀の箱』他) 岡田八千代 九〇―九六

偶感二三 (*教育、愛情、名声について)

野 枝 九七―一〇四

編輯室より (*六月号発売の事情を述べた項に「先月号は風俗壞

乱と云ふ名の下に発売を禁止されました。忌諱にふれたのは原
田さんのらしいです云々」とある。その他八月は休刊するこ
と、平塚明子四ツ谷伊賀町四二へ転居其他)

野 枝 一〇五―一〇六

・新刊紹介 (*ブランデス 吹田順助訳『十九世紀文学の主流』上

巻入内田老鶴園) 一〇六

・寄贈書籍 一〇六

・雑誌規定、奥附 (*印刷所変更)

・広告 (*別紙。『近代思潮叢書』入天弦堂、高浜虚子『子規居士
と余』八日社)

第五卷第八号 大正四年九月一日発行

(*第四周年記念号。八月は休刊した)

・表紙 (*意匠変更。奥村博史の画。以下第五卷第一二号まで同じ)

個人としての生活と「性」としての生活との間の争闘に就い
て(野枝さんに) (*感想) らいてう 一―二二

別居に就て思ふ事ども (*感想。泡鳴との別居について。生田花

世が談話を筆記したもの) 岩野 清 二四―二九

墮胎に就て(松本悟郎氏の『青鞥の発売禁止に就て』を読んで)

(*感想) 山田 わか 三〇―三八

森の大樹 (*詩)

百首歌

・詠草 (*青鞆社詠草原稿募集)

わがあやまち (*短歌)

山にて (*短歌)

八月の歌壇より

したもの)

初恋のなりゆき (*小説)

お隣のおくさん (*小説)

お小夜 (*小説)

或る家 (*小説)

姉 (*小説)

青鞆詠草より (*短歌。日枝みどり、他)

村の精神病者と生児 (*小説)

七月末の日記より

折りにふれて—日記より—

私信 (*伊藤野枝宛)

病衣を脱ぎて—生田花世様に— (*書簡。短歌八首を含む)

九州より—生田花世氏に— (*書簡。雑誌経営の實際に当つて

の心境)

野 枝 一五四—一六四

与謝野晶子 三九—四二

三ヶ島 蔚 四三—五一

茅野 雅 五二—五三

斎賀 琴 五四—五五

与謝野晶子他 五六—五七

岡田八千代 五八—六九

小林 かつ 七〇—七六

原田 皐月 七七—九二

山田 邦子 九三—一〇八

久保田富江 一〇九—一二一

生田 花世 一二三—一三二

浜野 雪 一三三—一三八

岡田 ゆき 一三九—一四一

野上弥生子 一四二—一四七

岡本かの子 一四八—一五三

野 枝 一五四—一六四

一六五—一六六

・新刊紹介 (*若山牧水『行人行歌』ハ植竹書院V、森田草平『自

敍伝』ハ日月社V、窪田空穂『万葉集選』ハ日月社V) 一六七

・寄贈書籍 一六七

・雑誌規定、奥附 (*発売所日月社に変更。発行年月日の下に

「特価金三十五銭」とある)

・広告 (*色別紙。森田草平訳『カラマゾフの兄弟』ハ日月社V、花

袋全集『第壹巻』ハ植竹書院V、「科学と文芸」九月創刊号ハ天弦

堂V、生田長江『最近の文芸及び思潮』ハ日月社Vなど)

第五卷第九号 大正四年十月一日発行

児童の世紀 (*論文)

エレン・ケイ

山田わか訳

一—一七

断片

らいてう訳

一八—二三

逝く水 (*短歌)

三ヶ島 蔚

二四—三〇

薄すみいろ (*小説)

奈 奈 子

三一—四〇

お小夜

原田 皐月

四—一五

白双の跡 (*小説)

佐藤 欽子

五四—六九

うづ (*小説)

荒木 滋子

七〇—八四

初恋のなりゆき

岡田八千代

八五—九二

世間知らず (*対話体感想)

岡田 ゆき

九三—九七

青鞆社詠草 (*短歌。畔蒜こ子、他)

九八—一〇一

編輯日より (*本号の編集其他。執筆者は伊藤野枝と生田花世)

九月の歌壇より (*若山喜志子他) 一〇二—一〇三
感想より追想へ (*加藤緑宛の書簡体感想)

・ 日月社より (*雑誌の発行遅延の知らせ) 生田 花世 一〇四—一〇六
・ 第二回奥村博画会 一〇六—一〇七

・ 藤村会より 一〇七—一〇七

編輯をへて 一〇七

・ 広告 (*別紙。らいてう『現代の婦人と生活』ハ日月堂、
「科 学と文芸」ハ天弦堂Vなど)

第五卷第十一号 大正四年十一月一日発行

・ 広告 (*表紙裏。窪田空穂『万葉集選』四版『続万葉集選』ハ日
月社V)

・ 広告 (*目次裏。片上伸『無限の道』ハ日月社V)

児童の世紀 (*論文)

エレン・ケイ 山田わか訳 一—一六

薄ずみいろ (二回) (*小説) 奈々子 一七—二八

うづ (承前) 荒木 滋子 二九—三八

夜から朝へ 浜野 雪 三九—五四

初恋のなりゆき (*小説) 岡田八千代 五五—六一

病床相思吟 (*短歌) 原 阿佐緒 六二—六三
新妻として (*短歌) 遠藤 琴子 六四—六五

秋思 (*短歌) 三ヶ島 葎 六六—六七

青鞥詠草 (*短歌。畔蒜と子他) 六八—七二

恋愛の自由と本能——鈴木某氏に答ふ——

折りにふれて (*日記) 山田 わか 七二—七九
岡田 ゆき 八二—八四

智恵子夫人の死 (*感想) 生田 花世 八五—八七

戦禍 (*感想) 斎賀 琴 八八—一〇三

断章 (*感想) 野 枝 一〇四—一一三

・ 編輯余事 (平塚明子の転居—四谷南伊賀町四十一へ—など)

・ 雑誌規定、奥附

・ 広告 (*別紙。平塚らいてう『現代と婦人の生活』ハ日月社V、

生田長江『最近の文芸及び思潮』ハ同上V、江部鴨村『タゴ

ルの思想及宗教』ハ同上V、森田草平『自叙伝』ハ同上V、高浜

虚子『子規居士と余』ハ同上V、「科学と文芸」、「現代百科学

庫』書目ハ日月社V、森田草平訳『カラマゾフ兄弟』ハ同上V)

第五卷第十二号 大正四年十二月一日発行

・ 広告 (*窪田空穂『万葉集選』四版、『続万葉集選』ハ日月社V)

傲慢狭量にして不徹底なる日本婦人の公共事業に就て

児童の世紀 (* 論文) 伊藤 野枝 一一 一八
山田 わか 一九 二九

短歌十首 与謝野晶子 三〇 三〇

初恋のなりゆき 岡田八千代 三一 三七

薄すみいろ 奈々子 三八 四七

たゞ一人 (* 小説) 加藤みどり 四八 五三

最初の家 (* 小説) 五明倭文字 五四 六八

恋の誇り (* 短歌) 原 阿佐緒 六九 七〇

私の生活 (* 感想) 三ヶ島 葎 七二 八三

未成品二章 (* 小品) 生田 花世 八四 八八

二つの心 (* 対話体感想) 岡田 ゆき 八九 九一

青鞥社詠草 (* 短歌。畔蒜と子他) 無門 照子 九二 九七

乙女椿零るゝ時 (* 詩) 九八 九九

高須光治画会主意書 山の井みね子 一〇一 一〇四

別れた友へ (* 書簡文) 一〇四

・新年特別号予告 伊藤 野枝 一〇五 一〇八

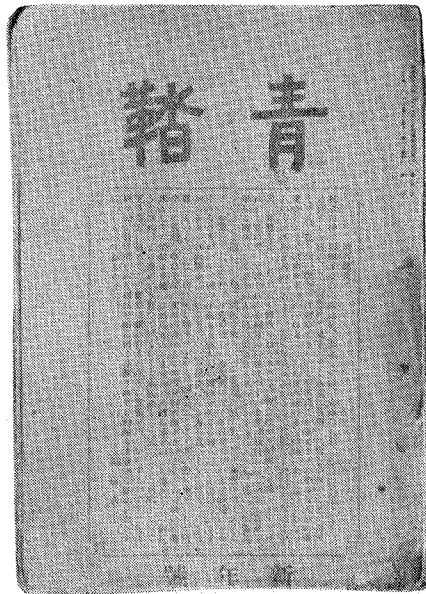
らいてう氏に 一〇九

・雑誌規定、奥附

・広告 (* 別紙。「科学と文芸」、森田章平『自叙伝』ハ日月社Vなど)

第六卷第一号 大正五年一月一日発行

・表紙 (* 写真参照)



婦人と社会の進歩——個人としての婦人—— (* 論文。目次には「婦人と社会」とある)

スコット・ニアリング 斎賀琴訳 一一 一〇

児童の世紀 (* 論文)

エレン・ケイ 山田わか訳 一一 二六

みちのくの雪 (* 短歌) 原 阿佐緒 二七 二九

海に行く弟へ (* 感想) 山田 邦子 三〇 三六

廢駅の夕 (* 短歌) 斎賀 琴 三七

草笛 (* 短歌) 三ヶ島 葎 三八 三九

薄すみいろ

奈々子 四〇—四六

十五のS子と社会と (*小説) 青木しげ子 四七—七四

暗潮—再び海に行きし従弟のために— (*小説)

佐藤 欽子 七五—九一

青鞥社詠草 (*短歌。畔蒜琴子也)

最初の家 五明倭文字 九五—一〇四

断章 (*詩) 吉屋 信子 一〇五—一〇六

・うめくさ (*パスカルの言葉)

自分と周囲 (*感想) 山田 わか 一〇七—一一一

初恋のなりゆき 岡田 八千代 一一二—一一五

星の空 (*小説) 加藤みどり 一一六—一三九

辣蕪のはな (*短歌) 茅野 雅 一四〇—一四一

日本婦人の社会事業に就て伊藤野枝氏に与ふ (*評論。前号所

載の伊藤文にふれて) 青山 菊栄 一四二—一五三

青山菊栄様へ (*本号の青山文への答え)

野 枝 一五四—一六五

折りにふれて (日記より) 岡田 ゆき 一六六—一六九

野枝子様はじめまして (*書簡) 青井 禎子 一七〇—一七五

編輯室より (*次号よりの編輯計画、平塚明子出産の報知、補助

団の事其他) 野 枝 一七六—一七九

・御礼 (*出産祝に対する平塚明子の礼状) 一七九

・雑誌規定、奥附 (*欄外に「本号に限り定価拾五銭」とある)

・広告 (*別紙。森田草平訳「カラマゾフ兄弟」三版八月社V、

小宮豊隆「演劇評論」A同上V、片上伸「無限の道」A同上V、

岩野清子「愛の争闘」A東京堂V、相馬御風「我等如何に生く

べきか」A同上Vなど)

第六卷第二号 大正五年二月一日発行

・表紙 (*前号に同じ)

生物学上より見たる婦人の能力

スコット・ニアリング 斎賀 琴訳 一—八

児童の世紀 (*論文)

エレン・ケイ 山田わか訳 九—一八

色々なこと (*感想) 野上弥生子 一九—二七

小さき者 (*小説) 吉屋 信子 二八—三八

水仙の花 (*短歌) 斎賀 琴 三九—四〇

最初の家 (*小説) 五明倭文字 四一—四六

初恋のなりゆき 岡田八千代 四七—四九

生き路 (*感想) 本庄 夏葉 五〇—五七

含葉嘯葉 (*短歌) 三ヶ島 菫 五八—五九

晩秋初冬 (* 短歌)

白山下より (* 感想)

更に論旨を明かにす (* 「公娼廃止と私娼増減の問題」などをめぐつて、伊藤文の論旨との相違を明らかにす)

再び青山氏へ (* 右文に対する反駁文)

折りこふれて (* 感想)

編輯室より (* 欧州大戦による洋紙価格高騰のため、頁数を減じたことなどについて)

山の井みね子 六〇― 六一

野 枝 六二― 六八

青山 菊栄 六九― 七九

野 枝 八〇― 八五

岡田 ゆき 八六― 八八

・新刊紹介 (* 大杉栄『社会的個人主義』へ新潮社、福田正夫詩集『農民の言葉』へ南郊堂書店、吉江孤雁『神秘主義者の思想と生活』へ天弦堂、レスター・ウオード著、堺利彦解説『女性中心説』へ牧民社、山崎俊夫『童貞』へ四方堂、厨川白村『狂犬』へ大日本図書株式会社)

・雑誌規定、奥附

・広告 (* 別紙。COSMOPOLITANへ平明社、科学と文芸)

へ交響社)

湘南伊豆文学散歩

野田 宇太郎 著

旅情と詩趣に富む湘南
伊豆―その地に縁故の
深い文学者たちの足跡
をたどり、文芸史の広
い視野に立つて書きお
ろした固期的な名著!!

横 浜 三 崎
返 子 鎌 倉
北 瀬 江 島
片 瀬 大 磯
茅ヶ崎 国府津
小田原 湯河原
沼 津 熱 海
伊 豆 伊 東
修善寺 湯ヶ島

新書判 布装 蕪酒本
写眞豊富 入 定價200円

東京 東 振替 257番
英宝社
京 田 西 神

本年度読売文学賞

唐木 順三

中世の文学

新しい視野から古典を究明した力作

本書は、芭蕉及び芭蕉以後に關する著者の多年の研究が、更に溯つて芭蕉へいたる道を探らんとして中世へ向つた所産である。中世文学の展開「明長明」兼好「世阿弥」「休」「道え」「芭蕉への道」七篇を収む。そのユニークな成果は、国文学界に寄与する所大であらう。重版発売中・B6判・上製 函入・価三五〇円

筑摩書房

東京 神田 小川町
振替東京165768